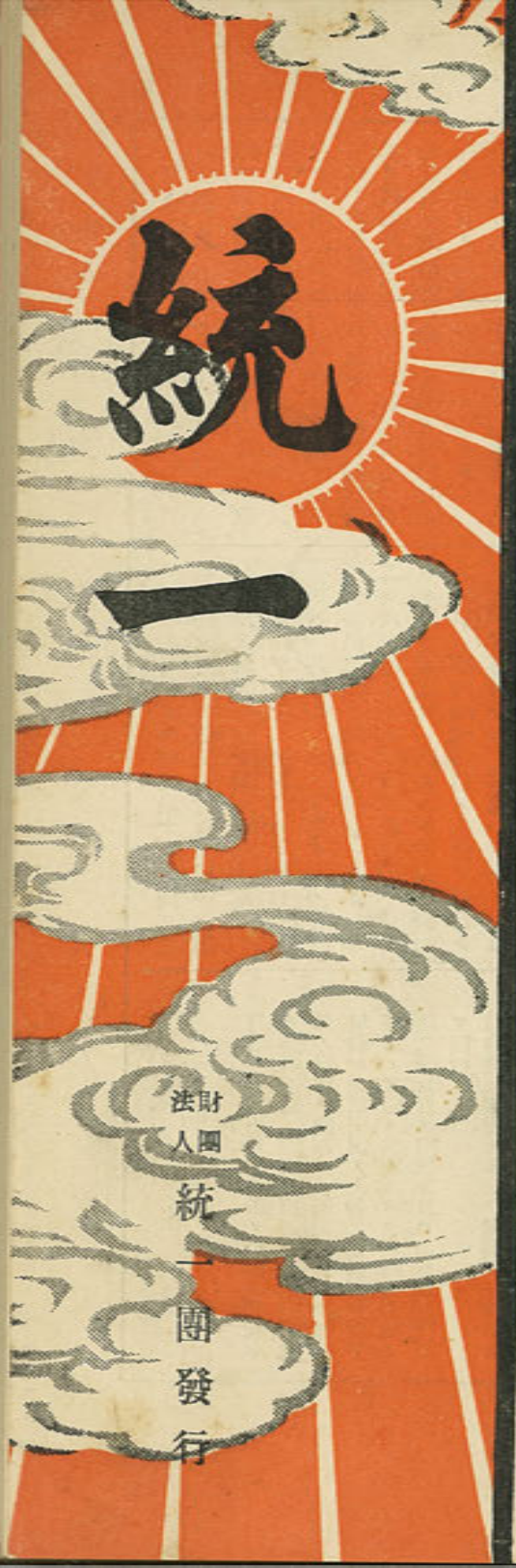

目次

聖訓摘要……本多日生
開目鈔講話（第十九講）……小林一郎
受持成佛……磯部滿事
佛教に關する作法……來馬琢道
記事
○本部團報　○昭和十二年度決算報告　團員動靜
○團費誌料維持費及寄附金領收

第四十三年　五月號

13.5.29

財團法人 統一團趣旨

統一團ハ創立以來實ニ四十有餘年ヲ經過ス其間内ニ佛祖正眼ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追隨ヲ許サヾル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ又知法思國會等アリ其悉頭宣傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見ン　又著述出版ニ於テハ大藏經要義　法華經要義　日蓮主義精要　聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ニ超エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行シ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法勳ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行セント欲ス　其中心ノ事業ヲ擧グレバ

第一佛祖正眼ノ法統ヲ擁護スル事　**第二**我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮スル事　**第三**此ニ適當スル學風ヲ振起スル事　**第四**時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事　**第五**小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ毎ニ覺醒ヲ促シツヽ嚴然トシテ統一ノ學風ト教化トヲ守持スル事是レナリ

教旨ノ正明　研學ノ闡達　活動ノ旺盛

此等ハ統一團ノ標語ナリ

蓋ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永久ニ持續セントスル本團事業ノ翼贊ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ　希クハ同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法爲國爲一切衆生切ニ懇望スル所ナリ

本團畧則

◎**目的**　本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ講明シテ佛祖正眼ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク指頭布教並ニ教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌『統一』ヲ發行ス

◎**維持員**　本團ノ事業ヲ翼贊シ一時金參百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ維持員トス

◎**贊助員**　一時金百圓以上又ハ毎年金五圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ贊助員トス

◎**正團員**　一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ醵出セラル、方ヲ正團員トス

◎**入團**　御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス

◎**誌友**　統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

聖訓摘要

本多日生

四菩薩造立鈔

これは『聖訓要義』の場合に大體講述して置いたので、再び言ふ必要もありませぬが、今現はれて居る問題に繋つて居るから、一言だけ重複して申して置きます。

これは富木殿から日蓮聖人に御手紙が來た、それに對する御返事でありますが、その富木殿の手紙に

本門久成の教主釋尊を造り奉り、脇士には久成地涌の四菩薩を造立し奉るべしと兼て聽聞仕り候らひき。（給蒙遺文錄一八五四）

お釋迦樣と四菩薩を造らなければならぬといふ話を、度々伺つて居りましたが、何時それを造るのでありますかといふ事をお尋ねになつたので日蓮聖人はそれに對してお答へになつて、最早や時至れるものであるから、之れを造るといふことは最も大切な事であると言はれた。玆に『本佛』、『本脇士』といふ言葉をお使ひになつて居るのであります、本佛といふ言葉は今はいろ〳〵胡亂なことに使つて居る、

日蓮本佛論ナンといふものもある、この間もある人の書いた物を見たら、『本多師は釋尊が本佛だといふけれども、それは在世に於ては釋尊が本佛であるが、滅後末法に於ては日蓮聖人が本佛であるといふやうな事を書いてあつた、そんな馬鹿な本佛があるか、時が二千年や三千年經過して、釋尊が本佛に成つたり、日蓮が本佛に成つたりするやうな事なれば、それは本佛ではない嘘佛といふものぢや、本佛といふものは、所謂哲學上の常住實在性といふものを有して居らなければならぬ、時間は古今を貫き、空間は十方に亘つて易ゆべからざるものに於て、本佛といふものは出て來るのである、それが僅かに、在世では本佛だが末法では本佛でないとか、そんな手拵へ見たやうな本佛といふものは、眞鍮の佛とか、青銅の佛といふやうなものであつて、値打の無い物である。さういふ頭の人は生涯日蓮教學を研究したからと言つて、到底物が判る譯のものではない。哲學の實在なら實在といふ事を論ずるに、在世の實在は何であつた、滅後の實在は何であつたといふやうな、そんな馬鹿な事があるか。だから壽量品は三世益物といふ事を說いて、常住不滅をお示しになつて居るのである、釋迦如來が在世だけに働くナンといふ事を見るのは、壽量品を了解しない所の者である、それは所謂他宗の人々が『釋迦は天竺に出て働いてそれきり行衛が判らぬ』と言ふて居るのと同じ事である、法華經壽量品を信ぜざる人の言草である。

松野殿女房御返事

上野殿御返事

曾谷殿御返事

これには孰れも特に引證すべき所がありませぬ。

寂日房御書

一切の物にわたりて名の大切なる也、さてこそ天台大師五重玄義の初めに各玄義と釋し給へり。日蓮となのる事自解佛乘とも云つべし、かやうに申せば利口げに聞えたれども、道理のさす所さもあらん。經に云く日月の光明の能く諸の幽冥を除くが如く、斯の人世間に行じて能く衆生の闇を滅すと、此の文の心のよく〳〵案じさせ給へ。（縮刷遺文錄一八七三）

これは日蓮聖人が自分が日蓮と名をつけられた事に就いて仰せられたのであります。名前といふものは大事である、今自分が日蓮と名乘つたのは、神力品に、日月の光明の能く諸の幽冥を除くが如く、斯の人が世に出て人の心の迷ひを醒すものであると說かれた、その上行菩薩の生れ代りとして自分は日蓮と名乘つて居るのであるといふ事を言はれた、だから日蓮といふお名前が、既に釋尊のお使といふ事を意味して居るものである。尙ほ御遺文中他の場所には、『日蓮』といふ二字は、『明かなること日の如く、淸きこと蓮華の如し』といふ所から附けられた、日は智慧を現はし、蓮は德を現はすといふ風に

仰せられて居る所もありますが、日蓮聖人のお名前の據り所でありますから、この一節を御紹介して置くのであります。

聖人御難事

各々師子王の心を取り出して、いかに人威すとも脅る事なかれ、師子王は百獸にをぢず、師子の子又かくの如し。彼等は野干の吼ゆるなり、日蓮が一門は師子の吼ゆるなり。（諸嗣道文錄一八七七）

これは文子の通りでありますが、法華行者、日蓮の仲間は皆師子王の如き確かりした考を持つて、恐怖を抱かないやうにしなければならない。師子の王は無論百獸の中に恐怖を抱かないが、併し子でも師子といふものは恐れない物である、師子の子と生れゝば小さい時分から決して恐怖を抱かない。丁度京都の動物園に師子の仔が居りますが、それは元氣なもので決して物に驚かない、この御遺文にある通り仔でも中々えらいものである。お前達は丁度師子の子であるから、決して人が少々ぐらゐな事を言つたからと言つて、それに恐怖を抱いてはならない、『日蓮が一門は師子の吼ゆるなり』で、最も剛健なる氣風を以つて堂々たる主張をしなければならぬ、痩犬が吼ゆるやうなことではいかぬ。その代りに己れの主張には眞心を打ち込んで、生命を賭しても戰ふ、これは決して間違ひないといふ事を以つて言はなければならぬ、『斯うも言へる』『アアも言へる』斯ういふ事を言つたら人がどんな顏をするだらう』といふやうな、狸のやうな了簡を持つて教を說くべきものではない。近來さういふ坊主があるが怪しからぬことである。丁度師子の穴の中に狸が紛れ込んで來て化けて居るといふやうな者がある、さうしてこの大事な信念を案さんとする。私の所に或る僧侶が來て言ふたことがある、それはちよつと日蓮教學も知つて居る、口も達者である、『私は表向き演說などをしては歩かんけれども、蔭で顯本の信者、統一閣の信者を迷はかしに廻はる、それを賴まれて或る團體から給料を貰つてフラリ〳〵と歩いて居りましたけれども、それも餘り面白くないから今度は一つあなたの方へ抱へて呉れゝば、引くり返つて他の團體の方へ行つてやります』といふので、面白い坊さんでいろ〳〵内輪の話をした、それで誰の所にも行つた、彼の所にも行つたと言つて名前も指して居りましたが、その話が面白い、『他の教團の安國會の手合も一つぱりに行つたことがある、何宗の檀家にも行つたことがあるが、中々表は强いやうなことをいふて居つても、結局多少みなグラつく、所が統一閣に於て鍛はれて居る人ばかりは、どうしても動かぬ、それはどういふ譯だといふと、大體信徒が法門の話などに入らない、お前の樣なお釋迦樣の惡口を言つたり統一閣などに行つたつて碌な事も無いだらうと言つて貶しに來るやうな者は、第一俺は氣に入らぬ、お前等と話をすることは胸クソが惡いから歸つて呉れ、お前は惡魔の使に違ひない、面貌を見てもさうらしいといふやうなことで忽ち追出されて、落第をしてしまつた』、さうして尙ほその坊さんがいふには、『あなたは實に能く信者を敎へて居る、私は實に敬服した』と言つて居つた、それから私は『能く敎へ

たか惡く敎へたか、自分はそんな事まで考へて居らぬ、瞞されて行く者があれば仕方が無い、可哀さうだけれども行くが宜い、けれども本當に我が講壇の話を聽いた者ならば、君〴〵らゐな者には迷はされはせぬだらうと思ふ、必ずや彼等は文底秘沈とか何とかいつて瞞かしに來るけれども、それは文の底ではない、文の横だといふ事を始終僕は敎へて居るから、君は多分文の横をやつたんだらう』と言つてやつたら『その通りでござんす』と言つて頭を掻いて居つた、そんな連中もある譯であるから瞞されてはいかぬ、正しき研究をお積みになるなら何處までもお積みになるが宜しい、何處に話を聽きに行つても宜しいけれども、今はちよつと日蓮主義に就いて理が入つて居る、盛んにならぬ間は宜かつたけれども、近來大分日蓮主義が盛んになつて來たものであるから、そこで又いろ〳〵の事情から狸や狐が入つて居る、どうか諸君は師子王の子であるが故に、左樣な者に瞞されないやうに御注意を希望するのであります。

臆病物覺えず、慾深く疑ひ多き者共は、塗れる漆に水をかけ、空を切りたるやうに候ぞ。（諸刷遺文録一八七八）

これは私非常に面白いと思ふ『臆病物覺えず』といふのはどういふ譯であるか、馬鹿者物覺えずといふならば判るけれども、臆病物覺えずといふのは少し妙であるが、併しこれが餘程面白い事である。自分に正義を通すといふ一つの意思がなければ、日蓮主義の如きものは唯だ智慧を以つて善惡を見たゞけではいかぬ、一種の膽力といふものがなければならぬ、正義を貫くには反對があり邪魔があるけれども、例へば今のやうな事を言つて來たりしても、そんな事に狼狽へてはいけない、其處に一つの膽力を有つて居らなければならない。この統一閣でいくらお學びになつても、臆病物覺えずで、フラフラするやうな精神の人は、いくら善い事を聽いて歸つても直ぐに忘れてしまふ、やらうと思ふてもフラフラしてしまふ、確かりした道念膽力を決めて日蓮の敎は學ばなければならぬといふ事であらうと思ふ。

それからその次の句も非常な警告であつて『慾深く疑ひ多き者共は』とある、慾が深くて疑ひが多い徒輩はといふ事で『者共は』と書かれた言葉からして早や少し荒い譯である。これは詰り臆病者と慾深き者と疑ひ深き者と、この三つを警められたので、さういふ者は『塗れる漆に水を注ぐ』で、漆を塗つてあるお盆の上に水をかけたやうなもので、ツル〳〵と辷つてしまふ、いくら善い敎を打ち込んでやらうと思つても、少しも其處に殘らないで皆辷り落ちてしまふ、だから自分の心に臆病と慾深と疑ひといふものがあつたら、漆を塗つた上に水を流すやうなもので、百遍說法を聽いても少しも留まらない、皆辷つてしまふ。又さういふ者に對つていくら熱心に法を打ち込んでも『空を切るが如し』と言つて、刀で空中を切るやうなもので、少しも手答へがない、故に本當の精神を以つて敎に來らんければ、決して敎は自分の所有にならぬといふ事を警められたものであらうと思ふ。臆病物覺えずといふ事は、私は餘程愉快に考へる、私の仲間などに就いて考へると思ひ當ることが澤山ある、宗敎や道德は唯だ學問ではない、今日日本の思想が混亂して來るのでも、これは正義を守る者が臆病であるからである、臆病であ

るが故に『此處は斯う言はんならぬ』といふ事でも、勢ひの赴く所日和を見て、『これは言はぬ方が宜い』といふやうな譯である、臆病物覺えず、實に慨歎すべき事である。今日は惡い方の者が割合に氣勢膽力が出來て居つて、亂暴な議論は遠慮なくやつて居る、さうして正しい者の方に膽力が無い、實に危いことであります。

持妙尼御前御返事

古より今に至るまで親子の別れ、主從の別れ、何れか辛からざる、されども男女の別れほど譬へ無かりけるは無し、過去遠遠より女の身となりしが、この男婆婆最後の善知識なりけり、散りし花、落ちし果の實も咲き結ぶ、などかは人の返らざるらむ、去年も憂く今年も辛き月日かな、思ひは何時も晴れぬもの故、法華經の題目を唱へ參らせて參らせ。（諸劇遺文錄一八八〇）

これは持妙尼が夫に別れた悲みに對して慰められたので、昔から親子の別れ、主從の別れ、何れも悲しいものではあるが、殊に男女の夫婦の別れは一層悲しい事である。併し人間は何時もさういふ悲みを繰返したものである、何時生れたからと言つて親子必ず別れたのである、主從も別れたのである、夫婦も別れたのである、六道流轉の生活は如何に幸福と言つても、それは或る時間を指すので、結局は皆悲劇を以つて終る、別れの涙である。左樣にして長い昔から女に生れて愛しい夫と別れ、可愛いゝ子と別れ、懐かしい親と別れして、何時も泣きの涙で來たものであるが、併し今度あなたが別れた夫が六道流轉の最後のものであつて、これがあなたを救ひ取つて呉れた所の善知識である、他の夫は如何に可愛いくても流轉の種を殘して別れたから、又同じ悲みを繰返したけれども、今度のあなたの夫は普通の夫ではない、これが最後の善知識となつてあなたに法華經の信仰を與へ、さうして先立つて別れたけれども、あなたに信仰を殘して行かれたから、あなたもそれに依つて成佛が出來る譯である。唯だあなたは亡き夫を戀ひ慕うて、散つた花でも春が來れば再び咲く、落ちた果の實も亦翌年の秋には實を結ぶものを、何故一度去つた夫は歸つて來ないかと思つて、花咲くにつけ果の實が結るにつけても夫の歸らない事を思うては、何時も憂ひに悲しき月日を送られることであらうけれども、それに就けても夫の殘して行つた法華經のお題目の信仰を忘れぬやうになさつたならば、やがてその戀しき夫にも會ふことが出來るのであるからと言つて、信心をお勸めになつたのであります。私はこの文章の中に於て『この男婆婆最後の善知識なりけり』といふ句が如何にも有難く考へたのである。男子でも自分の可愛いい女房があつたならば『俺は他の寶を汝に殘して行く事は出來ぬけれども、婆婆最後の善知識として汝に永遠の寶を殘して行くぞ』といふ事を妻に言ひ含めることが出來たならば、餘程愉快な事でありはせんかと思ふ。又女の方から言へば、自分の夫が左樣な善知識であつたならば、深く感謝して悦びに滿ちなければならぬと思ふのであります。

開目鈔講話（第十九講）

小林一郎

無量の釋子は波瑠璃王に殺れ、千萬の眷屬醉象にふまれ、華色比丘尼は提婆にがいせられ、迦盧提尊者は馬糞にうづまれ目犍尊者は竹杖にがいせらる。其上六師同心して阿闍世波斯匿王等に讒奏して云く、瞿曇は閻浮第一の大惡人なり。彼がいたる處は三災・七難を前とす。大海の衆流をあつめ、大山の衆木をあつめたるがごとし、瞿曇がところには衆惡をあつめたり。所謂迦葉・舍利弗・目連・須菩薩等なり。人身を受けたる者は忠孝を先とすべし。彼等は瞿曇にすかされて、父母の教訓をも用ず家をいで、王法の宣旨をもそむいて山林にいたる。一國に跡をとどむべき者にはあらず。されば天には日月衆星變をなす。地には衆天さかんなりなんど訴う。堪べしともおぼへざりしに、又うちそうわざわいと、佛陀にもうちそひがたくてありしなり。人天大會の衆會の砌にて時時呵嘖の音をきゝしかば、いかにあるべしともおぼえず、只あわつる心のみなり。

お釋迦様といふやうな非常に德の高い方でさへも、さういふやうな侮辱をお受けになり迫害をお受けになるのである。況してお釋迦様の教を受けるところの弟子などの經驗した艱難辛苦といふものは容易なものではなかつた。例へば波瑠璃王といふ王様の爲に、大勢のお釋迦様の弟子が殺されたことがある。これはこの波瑠璃王といふ王様の夫人が大變に身分の卑い人の女であつたので、この釋迦族といふのは印度でも極く優れた一族でありますので、この釋迦族の者が波瑠璃王の夫人の惡口を言つた。これを王が聞いて非常に憤慨して、その釋迦族の者に迫害を加へ、隨分多くの人を殺した。それでお釋迦様のお家もその釋迦族の中から出て居るし、隨つてお釋迦様のお弟子の中にも釋迦族の者が多いものでありますから、これ等の者が波瑠璃王に憎まれて、殺された者が隨分多かつた。斯ういふこともある。

それから又前にあつた阿闍世王が酒に醉うて象を放したといふ時に、お釋迦様は無事であつたけれども、澤山の眷屬といふ佛教に歸依して居る人々は、その象に踏まれて、或は怪我をしたり、或は命を失つた者もあつた。

或は華色比丘尼といふ夫人は誠心を有つて佛教に歸依して居る。それで提婆達多が佛教の妨げをして居るのを非常に憤慨して、或る時提婆達多が阿闍世の所を訪ねて歸るその歸途に、途中で提婆達多を捉へてその不心得を意見した。ところが提婆達多はその意見を容れて今までの惡かつた事を後悔するどころではない、女のくせに不都合なことを言ふといふので、非常に怒つて、到頭この華色比丘尼といふ人を殺してしまつたといふこともある。

それから迦盧提といふ人は、これはお釋迦様のお

弟子でありますが、王舍城といふ所の婆羅門に憎まれて、その婆羅門の爲に殺害せられ、死んだ後も恥辱を與へようといふので、その死骸を馬糞の中に埋めて置かれた。こんなやうな事實もある。

それから又目連は竹杖外道といふ婆羅門の者の爲に殺された。この竹杖外道といふのは、非常に亂暴な者で、いつでも大きな竹の杖を持つて居て、自分の意見に一致しない者が居ると、その竹の杖を以て打殺すといふやうなことをやつて居る亂暴な者でありますが、その竹杖外道が大勢居る所を目連が通り掛つたものでありますから、彼は釋迦の弟子の中でも殊に有力な者だ、あゝいふ奴を無事に通してはならぬといふので、その竹杖外道が大勢集つて來て、到頭目連をその竹の杖で打つて殺してしまつた。斯ういふやうなこともある。

その上に又六師といふのは、婆羅門教がいろ〳〵派が分れて居ります中に、殊に有力なのが六派あつた。その六派の婆羅門の主な者が同心をして皆協力一致して、さうして阿闍世王とか、波斯匿王とかいふやうな王の所に參りまして、お釋迦樣及びその一族の讒言をした。その讒言したのはどういふ風に言つたかといふと、あの瞿曇といふのは即ちお釋迦樣のことでありますが、あれは世界第一の大惡人である。あゝいふ者が到る處には必ず三災七難といふやうないろ〳〵な天地の間の大難が起る。或は地震が起るとか、大風が吹くとか、洪水が出るとかいろいろな大難が起る、これを見ても彼は惡い人間だといふことは能く判る。又大きな海は方々の河の水を集めて居る。大きな山には澤山の木が集つて居る。それと同じやうに、あの釋迦の一門には澤山の人間が集つて居るが、その澤山の人間といふものは皆惡い者である。心懸けの惡い大勢の人間を集め、さうして勢力を作つて居る。その爲に世の中に害を與へることは實に夥しいものである。その釋迦の所に

集つて居るところの人間といふものは、迦葉とか舍利弗とか目連とか須菩提とかいふやうな者である。斯ういふ者が皆釋迦を輔けて、さうしてその間違つた教を世の中に宣傳をして、社會に害毒を與へて居るのである。一體人間は世の中に生れたならば、忠と孝とを重んじなければならない。然るにあの迦葉や舍利弗や目連といふ者は、釋迦に騙されて、さうして父母の教訓を用ひないで出家をして、自分の家を捨てゝしまつて、親や一族を見捨てゝ釋迦の弟子になつて、又國民として國の爲に力を盡すといふこともして居ない。だから王樣の掟にも背いて居るのである。自分一人だけ山の中に籠つて清らかな生活をして、さうして世間の人間は俗人だなどと言つて自ら矜つて居るけれども、それはどうも忠も孝もまるで無視したやり方である。斯ういふ者が國に住んで居つては世の中の害になるから、この國に跡を留むべきものではない。斯ういふ者は追拂つてしまふのが當然である。斯ういふやうな惡者ばかりが釋迦を中心として集つて、世を惑はし、人を惑はすやうな教を世の中に弘めて居るから、その結果として天には日月衆星、日も月も星も運行が狂つて來るし又地上に於てはいろ〳〵な天が盛である、或は地震があつたり、洪水が出たり、饑饉があるといふやうなこともある。これは皆この釋迦或はその一族のなせるところの災禍である。これを何とか取締らなければならないといふことを申して、婆羅門の人々が盛に讒言をした。その讒言を信じた者もあり、信じない者もある。又阿闍世王などは、後には佛教に歸依をしたけれども、以前は婆羅門に歸依した者であるから、これ等の讒言を信じて、隨分佛樣やそれ等の弟子に對して迫害を加へた。これはなか〳〵耐へられないくらゐなことであつた。

それだのに、尙ほその上に困つたことには、佛樣にもお氣に入らないといふことであつて、佛樣は舍

利弗や阿難のやうな者に對して、お前達は見込が無い、お前達は佛には成れないと言つて、人天大會、人間界、天上界の大勢の者が集つた所で以て一々責められ、お叱言を言はれたりする。斯ういふことであるのだから、一體この佛弟子達はどうして宜いのか、世間からは迫害を受けるし、自分の師と仰ぐところの釋尊から叱られるといふやうな譯であるから『いかにあるべしともおぼえず』どうして宜いか判らない。たゞ慌てゝ居ただけで、一體どうしたら折角出家した甲斐があるだらう、折角お釋迦樣のお弟子になつた甲斐のあるやうにするにはどう心懸けたら宜いだらうと言つて、互に當惑して居つたのである。併しそれが法華經で所謂菩薩の行を學ぶといふ途が開かれて、初めて、その困難の中から脱出することが出來るのでありますから、法華經の有難いといふことは、無論この人々は十分知つて居なければならない筈であります。

其上大の大難の第一なりしは、淨名經の其汝に施す者は福田と名けず。汝を供養する者は三惡道に墮つ等云云。文の心は佛奄羅苑と申ところにおはせしに、梵天・帝釋・日月・四天・三界の諸天・地神・龍神等無數恒沙の大會の中にして云く、須菩提等の比丘尼等を供養せん天人は三惡道に墮べし。此等をうちきく天人、此等の聲聞を供養すべしや。

淨名經といふのは維摩經のことでありますが、維摩經の中に維摩居士が舍利弗・阿難といふやうな人に對して言つた言葉です。自分一人で覺りを開いて、世の中の人間を皆救はうといふやうな心持の無い者は、これは本當の佛のお弟子ではないのだから、さういふ者に布施をするに及ばない。若しさういふ自分だけ清らかに行ひすますといふやうな者に布施をするならば、その布施といふものは福田にはならない。即ち禍を生み出すところの本とは思へない。つまり布施をしても何の役にも立たない。斯う考へなければならない。又『汝を供養する』自分一人で行ひを潔くして居つて、世間をかまはないといふやうな者に供養して、自分一人善くするやうな生活を續けさせるといふことは、却て罪になる。さういふ事をやれば『三惡道』地獄・餓鬼・畜生ととい ふやうな境界に墮ちるかも知れないといふことを維摩居士が言つて居る、これは隨分激しい言ひ方であります。

その維摩經の中に說かれて居る心持をモウ少し詳しく言ふと、お釋迦樣が菴羅苑といふ所にお居でになつた時に、梵天・帝釋・日月・四天といふやうな天上界の者がそこに集つて、それから又天地のいろいろな神とか龍神といふやうな者もそこに集まり、又人間界の者は恒河の沙の數ほどの澤山の者が集つた所で、維摩居士が斯ういふことを言はれた。須菩提とか迦葉とか阿難とかいふやうな者に供養するならば、供養することが惡いのだから、その供養した者は、天上界の者であらうが、人間界の者であらうが、罪を犯したことになるのだから、結局は三惡道に墮ちる、地獄や餓鬼や畜生の境界に墮ちるだらうといふことを言つて居る、だから斯ういふ事を聞いたならば、天上界の者でも人間界の者でも、それは大變だ。自分達は須菩提とか迦葉とか阿難とかいふ人は、本當に佛樣の教を繼いで、世の中に弘める人だと思つて、今まで供養して居たのだけれども、さういふ人に供養することが罪だといふことになれば、迚もそんな事は續けられないと思つて、供養を止めてしまふだらう。

詮するところは、佛の御言を用て諸の二乘を殺害せさせ給かと見ゆ。心あらん人

人は佛をもうとみぬべし。されば此等の人人は、佛を供養したてまつりしついでにこそ、わづかの身命をも扶けさせ給しか。

さうすれば畢竟佛様が小乘の教だけで自ら足れりとする者には供養するなと言はれたのだから、結局供養する者が無くなつてしまつて、供養が無ければ自分で生活を立てることが出來ないから、自分達のお弟子の命を奪つてしまはれる。別に手を下して殺さなくても、生活が立たなくなるのだから、自分達を自然に自滅をさせるといふやうなことに見える。斯ういふやうに見えるならば、心あらん人は、誰でも佛様を隨分怨めしい方だ、永い間教を說いて、その教を信じて世の中に惑かれないやうな心持を思ひ立つたら宜いかと思ふと、さういふ者は迚も見込が無い。そんな者に供養しても駄目だと言つて、折角佛に歸依した者を突き放すやうなことをなさるならば、佛様といふものは、どうも情ない方だと思つて、佛を恨み、佛を憎むやうな心持になつて來るかも知れない。斯ういふのであります。

だから小乘の教を學んで、それで足れりとするのはつまらないといふことを言ひ切りでは、佛様のお心持は徹底しない、そこで法華經が說かれる。小乘の修行をして自分一人で淸らかな行ひをして居たのでは駄目だと斯う言つて、それならどうしたら宜いかといふ疑問が起きますから、そこで今度は法華經が說かれる。モウ一奮發だ、今まで小乘の修行をして世の中に執はれないやうな心持を作つたのは、更に進んで自分を捨てゝ世の爲、人の爲に力を盡さうといふその爲だ。そこを法華經で教へられる譯です。だから若し法華經であゝいふ事を教へないで、小乘の修行をするのは駄目だと言つて言ひ放しなら、佛様の仰しやつたことは徹底しないのであつて、結局

佛様のお弟子になつた者は皆途中で振捨てられることになるのでありまして、佛様のお慈悲といふものは無くなつてしまふ。

つまり言ふと斯ういふ順序になる。

執著→能捨→能施

先づ凡夫の生活は執著の生活です。執著といふのは、金とか物とか、地位とか身分とか、いろ〳〵なものに執著する、欲しい〳〵、人はどうでも自分さへ宜ければいゝ、人は落第しても自分さへ及第すれば宜い……といふのが執著の生活でせう。これではどうも仕方がないから、そこで凡夫の執著の生活を離れさせる爲に、今度は能捨の生活を說くのです。捨てなければいけない。ナーニ富とか位とかいふものはいつまで續くものではない。出世でも立身でも多寡が知れて居る。そんなものに執はれて居つたのでは、本當の人生の意義の有る生活は出來ないぞといふ、所謂捨て得られるやうな心持を教へるといふこと、それが小乘の教です。しかしこれで止まつてしまつては仕樣がない。そこで捨て得られたらどうするかと言へば、今度は人に對して施こす、斯ういふことに移らなければならぬ。自分が世の中に對して求める所が無いのだから、今度は逆に自分が世の中に對して施さう。自分が生きて居るといふことは、決して自分一人の爲に生きて居るのではないから、折角斯うやつて生きて居る以上は、自分の努力が少しでも世の爲め、人の爲め、國の爲に役に立つやうになつてこそ、本當に生きる甲斐があるのだといふので、執著を捨てゝ、捨て得られる生活に移つたならば、今度は捨て得られるといふことで滿足しないで、施せる、世の爲め、人の爲に力が盡せるといふ所まで行かなければいけない。これがつまり大乘の精神であります。言換へれば菩薩の行でありませう。それで法華經以前に於て、小乘の生活はつまらないといふことを極力言はれたのは、決して

お釈迦様がお弟子達を振捨てられるつもりではない。此處に止つてはいけないからモウ一奮發しろといふ意味を言はれた。そのモウ一奮發するといふことを積極的に、モッと詳しく說かれたのが法華經です。だから法華經を讀んで見ると、成程人間と生れた以上は佛樣のやうな、一切の人の爲に力を盡さうといふ心持を有たなければ生きる甲斐がないのだ。今まで執著の生活をして居つたのは洵につまらないけれども、さればと言つて一切の執著を捨てゝしまふだけではまだ本當ではない、捨てることが出來るならば、モウ一歩進んで世の爲、人の爲に施すといふ、恩を施し力を與へるといふ、そこまで行かなければならぬといふことに氣が附く譯です。そこに法華經といふものの特別な意味がある。この事をモッと詳しくだん〳〵言つて行かれるのであります。法華經を說かれない前の所だけで見ると、何だか今まで佛樣のお弟子になつて修行したことが少しも役に立たないといふことになるのだから、モウお弟子達を見殺しにされて平氣で居らつしやるかのやうに思はれる。それなら佛樣を皆疎んで、佛といふものは洵に情けの足らないものだ、折角佛のお弟子になつても後で振捨てられるやうなことなら、初めからお弟子にならなければ宜かつたといふやうな心持が起るだらう。

さういふ風に小乘の敎を信ずる者はつまらないといふことを言はれても、それでも舍利弗とか阿難とか須菩提とかいふ者が、兎にも角にも每日困らないで居たといふのは、どうしてかと言へば、それは大勢の人間が佛樣を信じて、佛樣に御供養申上げたから、その餘りを貰つて、その爲に他の弟子は命を繋いで居たといふくらゐなことであつた。若し法華經を說かれなかつたら、大勢のお弟子といふものは實に慘めなものだと思はなければならぬ。

されば事の心を案ずるに、四十餘年の經經のみとかれて、法華八箇年の所說なくて御入滅ならせ給たらましかば、誰の人か此等の尊者をば供養し奉るべき。現身に餓鬼道にこそおはすべけれ。

その一切の事情から考へて見ると、法華經が說かれる前に四十年餘りの經々が說かれて、法華經の八箇年の說法が無くて、その儘に佛樣が御入滅になつたならば、誰かこの佛のお弟子であるところの迦葉や阿難や須菩提・舍利弗といふやうな者を尊敬する者があるだらうか、これ等の者は皆世の中に見捨てられてしまふのである。さうして誰も供養する者もなく誰も保護する者もないから、生きながら餓鬼道に墮ちるといふやうなことに終つたらうと思ふ。

而に四十餘年の經經をば、東春の大日輪寒氷を消滅するがごとく、無量の草露を大風の雰落するがごとく、一言一時に未顯と眞實と打けし、大風の黑雲をまき、大虛に滿月の處するがごとく、青天に日輪の懸給がごとく、世尊法久後要當說眞實と照させ給て、華光如來・光明如來等と、舍利弗・迦葉等を赫々たる日輪、明々たる月輪のごとく、鳳文にしるし龜鏡に浮べられて候へばこそ、如來滅後の人天の諸檀那等には、佛陀のごとくは仰れ給しか。

ところが有難いことには、四十餘年の經を說き已つて後に法華經といふものを說かれて、今まで說いたのはまだ眞實を顯はさない、これからが眞實の敎だと言はれた。その眞實の敎の法華經といふものは何を說かれて居るかと言へば、二乘作佛、即ち今まで小乘の敎を學んで修行をして居た者も、モウ一歩進

んで大乘を學ばなければならないぞ、モウ一歩進んで菩薩の行を積まなければならないぞ、菩薩の行を積む爲には、その前提として能捨、己れの執著を捨てるといふことも必要である、斯ういふことを說かれた。だから法華經の敎に依つて、一切の今までの修行が活きて來る譯です。

これは幾度も同じやうな話をしますが、道を歩くのでもさうです。例へば私は笹塚に住んで居りますが、この會館の在る音羽から笹塚に行くには、牛込の町を通つて、新宿の町を通つて、それから笹塚に行く。ところが牛込で留つてしまつたら仕樣がない譯です、新宿で留つてしまつたら仕樣がない。笹塚まで行かなければ私の家には歸られない。しかし笹塚へ歸つて行く爲には、牛込を通つたのも役に立つて居る、新宿を通つたのも役に立つて居る、行先まで行かなければ途中を通つたのが皆無駄になつてしまふ。それと同じことです。この能捨の煩惱を捨てるといふ修行をしたのが、捨てただけでは役に立たないけれども、捨てた心持、即ち求めない心持を以て、更に世の爲に施し、人の爲に力を盡すといふことになつて來ると、この捨てたといふことが無駄ではない、これは皆役に立つて居るのであります。だから法華經といふものが一切の敎を活かすものだと言はれて居る。これはこの開目鈔をモウ少し先へ讀んで行くと、その事を言はれて居る、法華經に依つて初めて總ての敎は活きるのだ。何の爲に欲を捨てたか、欲を捨てるのは、欲を捨てるだけが究極ではないのであつて、欲を捨てたらば、今度は進んで人の爲に力を盡すといふやうになるだらうから、その力を盡す爲に欲を捨てたのだ。斯くあつてこそ欲を捨てた、煩惱を離れた甲斐があるではないか、斯ういふことになる。途中ではいけない。階下から二階へ上るのに、階段を昇るのですが、階段を昇るのは二階へ行く爲です。階段の途中で、少しばかり上に昇つたからと言つて、安心して坐睡をして居つては、何の爲に階段を昇つたか判らない譯でせう。だから敎といふものは徹底的に行かなければならぬ。眞實の所まで修行しなければ、途中で留つてしまつたのでは、今まで修行した甲斐はない譯であります。

それで法華經を讀んで見ると、大乘の修行をして菩薩の行を續けることを勸められて、その心持になつた須菩提や迦葉が、非常に喜んで、自分達は本當の聲聞だと言つて居る。眞の聲聞であつた、小乘の修行をして覺つた有難さが今解つた。今この大乘の修行をして菩薩の行を續けようといふ決心をした時に、初めて小乘の敎を習つた有難さが解りましたといふことを言つて居ります。これは非常に味ふべき言葉であります。吾々が欲を捨てるといふことは、欲を捨てるのが最後の目的ではないのであつて、欲を捨てた心持を以て、更に進んで世の爲、人の爲に力を盡すといふことになつて、初めて欲を捨てた甲斐があり、その價値があるといふ譯であります。

その事を能くこゝに說かれて居るやうでありまして、法華經を說かれる時になつて、今まで小乘だけではいけないと言つたその意味が本當に解つた。春の初めに大きな日輪が空に出て、さうしてその日の光が周圍を照すので氷が消えるのと同じやうに、又澤山の草木を潤して居るところの露に風が吹いて來ると、その風で露が皆散つてしまふやうに、今までの敎は未顯眞實、まだ自分の眞實の心持を打明けないものだと言つて、打消されて、さうして眞實の敎をお說きになつたのである。又大きい風が吹いて來ると、黑い雲を吹き散らして、空が蒼くなるやうに、又大虛に十五夜の月があると同じやうに、又大空に日輪が懸つて周圍を明るく照すと同じやうに、佛たる者は、法を說くこと久しい後には要ず眞實を說く、即ち一切の人間が佛の心持を以て自分の心と

して、一切衆生の爲に力を盡すといふその大慈悲の行ひをすることが、それが佛と一致する道だといふことを、必ず最後には說くのだといふことを仰しやつた。

さうしてこの心持を持ちさへすれば、誰でも大乘の道を學んで菩薩の行を積む心持になる。そこでその修行を怠らなければ、結局は佛樣と少しも違はないやうな智慧を具へ、大きな慈悲心を具へるやうになるといふことをお敎へになつた、その實際の例として、例へばこゝに居る舍利弗や迦葉のやうな者も今菩薩の行を積まうといふ心持を起したのだから、この心持を續ければ、皆佛に成るぞ、斯う仰しやつて、舍利弗は將來に於て華光如來といふ名の佛になるだらう、迦葉は將來に於て光明如來といふ名の佛に成るだらう。斯ういふことをお許しになつた。これは有難いことであります。迦葉や舍利弗が佛に成るといふことは、迦葉や舍利弗だけの問題ではないのだ、世の中に執著する心持を捨てゝしまつて、更に進んで菩薩の行を勵む者は、誰でも佛に成る、斯ういふことです。その佛に成るといふ實例として迦葉のことを說かれ、舍利弗のことを說かれたのでありますから、決してこの喜びは迦葉や舍利弗だけの喜びではない、この經典を讀む者皆の喜びでなければならない譯であります。

それで若し法華經を說かれなかつたならば、斯ういふやうな者は本當のお釋迦樣の心持が解らないで終るのだが、この事を說かれたものだから、『鳳文にしるし龜鏡に浮べ』即ち後の世までも傳はるところの、永く人々が仰ぎ瞻るべき敎としてこの事を後に說き遺されたからこそ、初めて佛が御入滅になつた後でも、迦葉にしろ、舍利弗にしろ、須菩提にしろ、それ等の人々が世間から佛樣を敬ふと同じやうに敬はれるやうになつたのである。

水すまば月影をしむべからず。風ふかば草木なびかざるべしや。法華經の行者あるならば、此等の聖者は大火の中をすきても、大石の中をとをりても、とぶらはせ給べし。

斯ういふ譯で法華經といふものは、實に前後に類の無いやうな有難いお經である。法華經を說かれて初めて、一切の人間が何を目標にして修行したら宜いか、何を目當にして信心をしたら宜いかといふことが本當に解つたのであるから、その法華經が末の世に弘まるといふ時になれば、この法華經に依つて佛に成ることの出來た舍利弗とか迦葉とかいふ人々は、必ずこの法華經を弘める人を陰ながら護つて、力をお副へになる違ひないだらう。月が影を宿さうとしても、水がなければ影は映らないが、水が澄んで居れば月が影を映す、その月の影を吝しむことはない。又風が吹けばその風に草木が靡かないものはないと同じやうに、命に懸けて法華經を弘める者があれば、法華經は弘まるのだが、その法華經を弘める者が出て來れば、『此等の聖者』即ち舍利弗、迦葉といふやうな人々は大きな火が燃えて居つてもその火の中を通り、大きな石が道を塞げて居つてもその石の中を通つて、この末の世に法華經を弘める人を訪ねて、これに力をお副へ下さるといふことは間違ひのないことである。斯う思ふと、末の世に出て法華經を弘めるといふことは大變な有難いことである。必ず自分の力には天も護つて下さり、諸菩薩もこれを護つて下さると思ふ。

迦葉の入定もことにこそよれ、いかにとなりぬるぞ、いぶかしとも申すばかりなし。後五百歲のあたらざるか、廣宣流布の妄語となるべきか、日蓮が法華經の行

者ならざるか。

さうだのに日蓮がこの法華經を弘めて二十年も經つけれども、一向扶けて下さる氣色もないのはどうしたものだらう。斯う又疑ひを起す。迦葉といふ方は晩年に於ては入定をして世の中の生活を全く離れて靜かに毎日を送つて、靜かに世を去られたといふことであるが、入定も時に依るではないか、末の世に至つて敎を弘めるといふ斯ういふ大事な時になつて、自分は入定したからかまはないと言つて濟ませる筈はないだらう、どうしたことだ。何故日蓮がこれほど熱心になつて敎を弘めるのに護つて下さる人が無いだらうか、斯ういふ疑ひが起る。或は法華經といふものは佛の御入滅後二千年過ぎて後の五百歲に於て世の中に弘まるといふことが言つてあるが、それが實現されないのか。或は法華經は遍く世に弘まると佛樣は仰しやつたが、その事が僞りになるのだらうか、或は又日蓮が法華經を世の中に弘めるところの資格の無いものであるのだらうか、どうもこの所は餘程しつかり考へないといふと、この疑ひは決定が出來ない。

法華經を敎内と下して、別傳と稱する大妄語の者をまもり給べきか。捨閉閣抛と定めて、法華經の門をとぢよ、卷をなげすてよと彫りつけて、法華堂を失へる者を守護し給べきか。佛前の誓は有しかども、濁世の大難のはげしさをみて、諸天下り給ざるか。日月天にまします、須彌山いまもくづれず、海潮も增減す、四季もかたのごとくたがはず。いかになりぬるやらんと、大疑いよいよつもり候。

若し法華經を弘めるのが佛のお心持に叶はないで、

折角骨折つても法華經が弘まらないといふことであるならば、或は禪宗の者が言ふやうに、法華經をホンの手始めのやうな敎だと思つて、これを輕蔑して、眞實の敎は、佛のお心持から自分の心持に傳つたのがそれが眞實の敎だといふので、それを『敎外別傳』などと言つて居るところの禪宗の者などが、却て佛のお心持に叶つて、こんな出鱈目などを言つて居る者を佛は護つて居らつしやるのではなからうか。斯ういふ疑ひも起つて來る。或は又支那の善導とか、日本の法然等が言ふやうに、世が末になつて來れば人間の機根が下つて來るから、法華經だの華嚴經だのといふやうなものを見たところで解りはしない。さういふものは捨てるが宜い、さういふものの門は閉ぢるが宜い、さういふものは綴くが宜い、さういふものは抛うつが宜いと言つて、『捨閉閣抛』といふことを、口で言ふばかりでなく、書物にしてそれを世の中に示して、念佛の敎を世に弘めた。その爲に法華經を弘めるところの寺や堂をまるで義徵さしてしまつた。そんなものを佛樣はお護りになるのだらうか、どうもチョット考へて見ると解らなくなつてしまふ。

それは多くの天上界の神々が、佛樣の居らつしやる所でお誓ひ申して、末の世に至つてこの法華經を弘める者があれば、自分達はさういふ者を護りませう、力を副へませうといふ約束をしたといふことは、法華經の本文の中に書いてあるけれども、今の世の中が餘り難かしい世の中で、法華經を弘める者に對して迫害が多いものだから、これは難かしいと思つて、天上界の方々も、臆病になつて、さうして約束を違へて、天から下つて日蓮を助けるといふことをして下さらないのかナ、こんな風にも思はれる。併し日も月も照り輝いて居る、須彌山も今以て崩れない。海の潮も昔の通り增したり減つたりする、春夏秋冬の氣候といふものも昔の通り變らない。それ

だのに、この法華經の行者を護るといふ天の護りが今以て現れて來ない。法華經の行者を護るといふいろいろな菩薩の誓ひは無駄になつて宜いといふことであるならば、一體どうしたことであらうと思つて、大きな疑ひが彌々まさつて來る。

これは日蓮上人の本當の心持を打明けられて居るのであります。實際人間が世の中に立つて正しい事をやつて見れば、斯ういふ心持が互ひ違ひに出て來るといふことはこれは當然です。正しい事をやれば宜いナと思ふ後から、併し正しい事をしても世間に行はれない、これはやはり止めたが宜いかナと思ふ。それから又さう諦めたものではない、やはり正しい事をやつたら宜いかと又思ふ。又今度は正しい事をしても行はれなければ仕樣がないナ、斯う思つて來る。信ずるといふ事と疑ふといふ事とが、互ひ違ひに斷えず起つて來るといふことは人情であります。そこをごまかしてはいけない、吾々が今世の中で善い事をしようといふのでもやはり同じ事です、これは善いナと斯う思ふと共に、善い事は行はれないから、やはり止めた方が宜いかナと又思ふ。併しモウ一奮發やらうと思ふ、又今度は奮發しても駄目かナと思ふ。斯ういふ風に信ずるといふことと、疑ふといふこととは斷えず起つて來る。或は疑ひ、或は信じて行く間に、佛の教といふものが大きなものであつて、吾々の心に佛性が有れば、疑つたり信じたりして、結局に於てこの佛の教といふものは最後の法華經になつてこの疑ひを皆蹴飛ばしてしまつて、自分の信ずる所に向つてまッ直に行く。斯うなつて行くのであります。そこまではなか〳〵一筋繩では行くものでない、いろ〳〵な所を通つて行く。そこを日蓮上人が少しも僞る所なく打明けて居らつしやる。或る時は深く信じ、或る時は自分の力では及ばないかナと疑つたり、疑つたり信じたりいろ〳〵考へて、結局佛を信ずる、法華經を信ずるといふことで一切の疑ひを發ね除けてしまつて、命に懸けてこのお經の爲に力を盡すやうになるのだといふことを、これから後に言はれるのであります。

これは日蓮上人が御自分の事を言つて居らつしやるのですが、これに依つて吾々は本當に教へられるのであります。日蓮上人は『日蓮の弟子檀那たる者は日蓮が如くし候へ』自分と同じ道を歩いて來いといふことを言つて居らつしやる、その通り日蓮上人は或る時は一心になり、或る時は自分の力の足らないことを疑つたりして、あれこれやつて、結局疑を捨てゝ、この教の爲には一切を犧牲にしようといふ決心をされた。その態度と、その通つて來る道筋をこゝで說明して居らつしやる。だから吾々もこれを日蓮上人だけのことと思つてはいけない。自分のことと思はなければならぬ。自分が日蓮上人の歩いて行らつしやつた後を附いて歩いて行けば、結局は一切の疑ひを捨てゝしまつて、この正しい教の爲に一切を抛つて行かうといふ心持になれるに相違ないのであります。眞實の事を繕ひもなく飾りもなしに、その儘打明けて說いて居らつしやるのでありますから、そこの所は非常に尊いのであります。

マアこゝ迄疑ひを持つて來て、更に一轉致しまして、斯うは言ふものの、法華經のやうな大事な教を世に弘める爲に力を盡す功德が大きいといふことは疑ひのないことだといふ風に、又話が進んで參ります。

又諸大菩薩・天人等のごときは、爾前の經經にして記莂をうるやうなれども、水中の月を取らんとするがごとく、影を體とおもふがごとく、いろかたちのみありて實義もなし。又佛の御恩も深くて深からず。世尊初成道の時はいまだ說教もなかりしに、法慧菩薩・功德林菩薩・金剛

幢菩薩・金剛藏菩薩等なんど申せし六十餘の大菩薩、十方の諸佛の國土より教主釋尊の御前に來給て、賢首菩薩・解脫月等の菩薩の請におもむいて、十住・十行・十廻向・十地等の法門を說給き。

いろ〳〵な菩薩とか天上界、人間界の者が、法華經以前の中でも、記莂を得る、今の儘で修行して行けば結局佛の境界に行けるぞといふことをお許しを得た場合も隨分ある。けれども、お前達は將來佛に成るぞと請合つて下さつた、そのお釋迦樣が、どれだけの力を有つた方かといふことが、まだ法華經以前では解つて居ない。即ち印度の國王の子と生れて、人生の問題に煩悶苦悶を感じて、出家して修行して佛に成つたといふだけのことである。法華經の壽量品になつて初めて所謂久遠の本佛といふことが現れて、この佛樣は際の無い昔からこの娑婆世界で佛樣であつたので、又際の無い後の後までもこの娑婆世界に在つて吾々をお護り下さるといふことが解つた。それが解らない前の佛樣が、お前達は佛に成るぞと言つて請合つて下さつても、その請合はれたことが實際當てにならない。何故なら請合つて下さつた佛樣が、そんな永遠なものでないやうに見えて居るのだから、さうして見ればその請合は當てになるやうな、ならないやうな、甚だ心細い譯でせう。ところがそれが法華經になつて、この佛は遠い昔から遠い後まで娑婆世界で敎をお說きになつて、一切の人をお救ひになるのだといふことが解つたから、そんな廣大な佛樣が、お前達大乘の修行をしろ、菩薩の行を積め、さうすれば佛に成れるぞと言つておいて請合ひ下さつた。この請合は間違ひがない、確にこれは當てになることだといふことが解る譯であります、だから、壽量品を讀んで初めて佛に心から歸依することになる、この佛が絕對だといふことが解りますから、その絕對なる佛の敎といふものは綏む筈がない。その絕對なる佛が、お前達も今に佛と同じ者に成れるぞと仰しやつたから、その仰しやつたことは少しも疑ひを容れるに及ばぬ。斯うなつて來る譯であります。

その壽量品の久遠の本佛を說き明かされない前の佛の敎といふものは、有難いやうだけれども、根抵がしつかり定まつて居ないのでありますから、水の中の月を取るやうなものである。物の影を本體と思ふやうなものである。色や形は外に見えたところでは有難さうに見えるけれども、實際の意義といふものはまだ十分でない。又佛樣の御恩も、法華經の壽量品を說かない前だけで言ふと、大層御恩が深いやうだけれども、まだ深くない。

何故ならば、華嚴經を讀んで見ると、お釋迦樣が佛陀伽耶で御修行になつて、さうして覺りをお開きになつた、その覺りをお開きになつてまだ何もお說きにならない時に、十方の他の世界から法慧菩薩・功德林菩薩・金剛幢菩薩・金剛藏菩薩といふやうな六十餘の大菩薩がそこに集つて來られて、さうしてお釋迦樣の前で以て、賢首菩薩・解脫月菩薩といふやうな人の望みに應じて敎を說かれた。これは華嚴經を讀んで見ると解る。佛の說法の前に十方の世界から來た菩薩が敎を說いて居る。その敎を說いたのが十住・十行・十廻向・十地といふやうな、所謂『五十二位』の法門を一通り說いて居る。

この『五十二位』といふのは、

十信
十住
十行
十廻向
十地
十等覺
妙覺

をいふのであります。この十の一々の細かい事は略しませうが、吾々が佛教を學ぶには、この筋道は必ず通らなければならない事なのです。『十信』といつて、信ずるといふことが先づ初めです。信じない前があります、信じない前は研究とか或は趣味とかいふものでせう。大概は佛教のことを初め習ふのは佛教とはどんなものだか知りたいといふやうな研究心でやるか、それでなければ俺もこの頃大分閑になつたから佛教でもやつて見ようかといふやうな、書畫骨董をいぢるくらゐな心持でやるのでせう。大概研究若くは趣味でやる。それはまだ佛教徒とは言へない、佛の弟子とは言へない。さういふやうに或は研究でやつたり、或は趣味でやつたりして居つて、だん〳〵解つてこれを信ずる、佛様の教を眞實だと深く信ずるといふことになると、そこで初めて佛の弟子となる。佛弟子の仲間入りが出來る譯です。ですから吾々の修行は『信』といふことを以て始まるのです。

ところで信といふことは、經典の中に於ては『信解』と言つてあります。こゝでは『十信』と言つてありますが、經典の他の言葉で言へば信とは信解の意味で、『解』とは譯が解ることでせう。信といふのは有難いと思ふこと、この信と解とは助け合ふのであります。本當に解れば信ずるといふやうになるが、信じて來ればモッと能く解る。だから信に依つて解を生み、解に依つて信を進めて行くのであります。何でもかまはず信じろといふことは佛教では許さない。『兎に角信じろ』……そんな妥協ではいけないのであつて、解れば信ずる心持になる。信じない前に解つたといふのは本當に解つたのではない、いい加減に解つた。信じて來ると、信ずる力に依つてその意義が解つたのが本當に解つて來る。だから解に依つて信を生み、信に依つて解を助ける、信じて解つて、解つて信じて、又信じて又解つて、信と解信と解とがお互に助け合つて、スッカリ解るやうになつて本當に信ずるやうになる。これは佛道の修行としては非常に大事なことであります。だからこゝに信とありますのは、たゞ有難いと思ふことではありませぬ。解を含んだ信であるといふことを知らなければならぬ。

兎に角佛道の修行を致しますには『信』といふことが初めであります。これを十に分けて說いてありますが、その一々は略しませう。兎に角信ずるといふことに淺い信じ方もあれば、深い信じ方もありますから、これが十に分れて居る譯です。

ところが信ずると申しましても、何分世の中は複雜でありまして、人生の出來事も多いものでありますから、その信ずることが同じ狀態で居ない。私なども佛教を信じて居るつもりだけれども、この信ずるのが波を打つて居る。非常に有難いと思ふこともあるし、時に依れば大したこともないナといふやうな疑病な考が起る。時に依れば又非常に有難く思ふ。さういふ風に信といふものが波打つて居る、程度が同じではない。それでは本當の信ではない、けれどもどうも吾々は凡夫でありますから、世の中の事に心が惹かれるものでありますから、信といふものが波打つて居ります。ところがだん〳〵その信を續けるとその波が少くなつて、結局ズッと同じ狀態で信じられるやうになる。それが『住』です。住といふのはその信が同じ狀態で續くことで、これが十ある。どうも今私共は說明は出來るけれども、自分ではまだなか〳〵そんな所に行きませぬが……、併しまァだん〳〵修行して行けば、この信が動搖しないで、同じやうな心持で信じられるやうになるものでせう。そこまで行つたのが住といふ境界で、たゞ信仰が續くといふだけではない、同じ狀態で續くといふことであります。緩んだり緊張したりするやうな變化が無くて、同じやうな狀態で續きます。これ

を住と申します。

それからその住といふことになりますと、そこで初めてその信じたことが『行』の上に現れて、行ひと自分の心持とが離齬しないやうになつて來る、信じない前でもそれは善い行ひが出來ます。出來ますが、その信が續かない間の善い行ひといふものは、善い行ひも續かない。或る時は善い行ひをするけれども、又時に依ると飛んでもない間違ひをして見たり、或は又時々考へて善い行ひに戻つたり、行ひといふものが又動搖を免れない、善くなつたり惡くなつたりする。ところがこの信仰が同じ狀態で續くといふことになると、實行の方も同じやうに續いて行きます。これが『行』であります。行といふのはたゞ實行するといふことではない。同じやうな心持で實行が續けられるやうになる境界であります。これはなか〳〵尊いことでせう、今の私などには到底そこまで行けるものではありませぬけれども、本當に行つたらそこに行けるに違ひない、その行が出來て來る。

行が出來て來ると『廻向』と言つて、自分のやる事が皆周圍の人の役に立つて來る。廻向とは自分の受取るものを人に讓り與へるといふこと、自分の一擧一動、手の動かし方でも足の踏み方でも、言葉に現れる所、自分の身の行ひに現れる所、悉く一切の人に廻向することが出來る。即ち總ての人の役に立つやうになる、これが所謂廻向の境界であります、これも吾々共はなか〳〵さう行かない。吾々共のやることは、時に依れば人の役に立つこともあり、時に依れば人に迷惑を及ぼすやうなこともある、ムラなのです。私共は始終さう思ふ。私のやうなつまらない者でも、少しは人の役に立つ事も出來るだらうと思ふけれども、併し又隨分人に迷惑を掛けたり、人を困らせるやうなこともして居るのであつて、これはムラなのです。ところが信仰がチャンと決定して、毎日の行ひに狂ひがないやうになつて、そこで初めて自分のやることが一つ〳〵皆周圍の人の役に立つ。即ち廻向といふ境界に行けることになる。さうなつたら本當に人間が世の中に生きて居る甲斐があることだらうと思はれる。それが廻向の狀態であります。これが『十廻向』といつて又十段に分れて居るのでありますが、その細かい事は略しませう。

そこで自分の行ひが皆世の中の役に立つといふことになりますと、この分で行けば必ず自分も佛に近く成れるナといふ自信が生れる。それが『十地』といふことで、地は自信を有つて居ることです。今の私共にはそんなことはなか〳〵出來ない。理窟の上では知つて居ります。私もナーニ大乘の修行を積んで行けば、今は凡夫でも佛樣に成れるのだといふことは一通り理窟では知つて居りますが、サア自分で自分を振返つて見て、今の俺が佛に成れるかナと思ふと、誠に心細くなつて、どうもこれでは成れさうもないナ、行先が甚だ見込がないナといふやうな弱い心持も出て來る。併ながらこゝまで行つて、自分の一擧一動が悉く人の役に立つといふ境界になれば、ハヽアこの分で行けば自分も必ず佛と一致し得るナといふ確信が得られる。だからその信ずることが少しも動かなくなつて來る。これを『地』と言ふ。地とは地面が動かないやうに、自分が佛と一致し得るといふ確信が動かなくなる。その程度が又十段あります。

それから今度は『等覺』といふのは、佛と等しき覺りを開くといふのですから、佛樣から御覽になつて、モウそれなら宜しい、申分がないといふくらゐになる。さうして結局『妙覺』といふのは佛で、大乘の覺りを開くことになる。

これが五十二位といふのでありまして、これは華嚴の方でも天台の方でもこれを認めるのでありま

す。今の私共はマア十信の初めの信の所さへもしつかり行かないのでありますから、他の方は前途遼遠ナンですけれども、併しさういふ説明を聽いて見ると、成程さうだらうナ、成程さういふ風に一歩々々と進めて行けるものだらうナといふ想像だけは附くのです。それをやはり目當として、ナーニ人間の生命はこの世だけではないから、この世だけで出來なければ又後の生命に於て更に修行を積んで、更に信心を勵んで、結局は等覺に達し妙覺に達するといふことを忘れないやうに、縱ひ現在の自分はつまらぬものであらうとも、失望したり、己れを輕んじ、己れを侮つたりすることのないやうにして、その信心を勵んで行かなければならないといふ譯であります。これが今の五十二位の大體のお話であります。

此等の大菩薩の所説の法門は釋尊に習ひたてまつるにあらず。十方世界の諸の梵天等も來て法を説く、又釋尊にならひたてまつらず。總じて華嚴會座の大菩薩・天龍等は、釋尊已前に不思議解脱に住せる大菩薩なり。釋尊の過去因位の御弟子にや有らん。十方世界の先佛の御弟子にや有らん。一代教主始成正覺の佛弟子にはあらず。

その十住、十行、十廻向、十地といふ教が華嚴の中に説いてあるのでありますが、その教はお釋迦様がお説きにならぬ前に、他の世界から來たと言はれる法慧菩薩、功德林菩薩等が説いて居るのであります。だから此等の大菩薩の所説の法門は、お釋迦様に習つて斯ういふ事を説いたのではない、佛様のお説きにならない前から諸菩薩が斯ういふ事を説いて居る

又その諸菩薩達に續いて、十方の世界の諸の梵天等が來て法を説いた。これもお釋迦様に習つたのではない、お釋迦様は何も仰しやらない間に、天上界の者がそこに集つて來て教を説いた。これは華嚴を讀んで見ると解るのでありますが、さういふ風になつて居る。總じて華嚴經を説かれるその初めに大勢集つた者の大菩薩とか天とか龍とかいふものは、釋尊が教をお説きにならない前に、己に不思議解脱、世間の迷つた生活を離れるだけの力を具へて居るところの大菩薩で、非常に德の高い方である。だからお釋迦様が覺りをお開きになつてから以來のお弟子ではない、釋尊の成道の前に於て、『因位』といふのは、佛に成る原因を積むこと、即ち菩薩の修行でありますが、お釋迦様が前の世に菩薩の修行をなさつた時に、この人々はお弟子になつたのであらうかとも思はれる。或は又お釋迦様のお弟子でなくして、十方の世界のお釋迦様より前に出られた佛様のお弟子であつたかとも思はれる。兎に角印度に出て出家をして、覺りをお開きになつた。その修行して覺られてから後のお弟子とは思はれない。何故ならお釋迦様が何も仰しやらない前に教を説いて居るのだから、その印度の淨飯王の子としてお生れになつたお釋迦様の覺りをお開きになつた後のお弟子とは思はれない。だから華嚴の時にはお釋迦様のお弟子といふものはない。

阿含・方等・般若の時、四教を佛の説き給ひし時こそ、やうやく御弟子は出來して候へ。此も又佛の自説なれども正説にはあらず。所以如何となれば方等・般若の別・圓二教は、華嚴經の別・圓二教の義趣をいでず。

それからその華嚴經が終つて、その次に阿含・方等・般若といふやうに、だん〳〵と釋尊の説法が進んで行つた時に、初めて佛の教に歸依する者が出來た。

『四教』といふのは阿含・方等・般若といふやうな法華經以前のいろ〳〵な教でありますが、さういふ教をお說きになりました時に、漸くにして佛樣のお弟子といふものが出來た。けれどもその阿含・方等・般若といふやうないろ〳〵な經典の中でお說きになつた事は、佛の口からお說きになつたことには相違ないが、『正說にはあらず』佛の信じて居らつしやる事をスツカリ打明けてお說きになつた教とは思はれない。何故なら阿含・方等・般若といふ所で說かれて居るのは、前の華嚴經で說かれて居る事以上には出て居ない。要するに華嚴經で說かれて居る事の一部分を、又繰返して說かれたといふくらゐのものに過ぎない。方等般若等の別圓二教は、華嚴經の別圓二教の意味を出ない。

この『別圓二教』といふことは

藏教
通教
別教
圓教

これを『四教』と申します。『藏』といふのは多くの物を藏めるといふ意味であつて、詳しく言へば三藏教と申します。

藏教（經藏、律藏、論藏）

これは佛教ばかりではなく、凡そ人に教を說くといふことは、子供に物を教へるのでも同じことでありますが、經と律と論と三つ揃はなければ教といふものにならない。『經』といふのはどういふのかと言へば、人間としては斯うすべきものだと教へるのがそれが經です。それから『律』といふのは人間としては斯ういふ事を慣しまなければならぬぞと教へるのが律、それから『論』といふのは、何故これを實行しなければならぬか、何故これを慣しまなければならぬかといふ說明です。この三つがなければ教にはならない。例へば早起きをしろといふのは經であります。朝寢をすることはいけないといふのが律であります。何故早起きをするが宜いかと言へば、それは身の爲だからといふ說明は論であります。いつでも教といふものは、斯うしろといふことと、斯うしてはならないといふことと、それから終ひに何故しなければならないか、何故してはならないかといふ說明と、この三つがありまして、初めて教といふものになる。吾々は子供を教へるのでも、この經と律と論とがなければ教といふものにはならない。ところがこれが甚だ難かしいので、動もするとどれかに偏つてしまふ。だから本當の完全な教といふものは出來ないのでありませう。佛樣は教をお說きになる時に、經と律と論とを揃へてお說きになつた。人間としては斯うすべきだぞ、人間としては斯ういふことは愼しめ、それは斯ういふ譯だ、斯ういふ理由だから實行しなければならぬ。斯ういふ理由だから愼しまなければならぬといふので、經と律と論とを揃へてお說きになりますからこれを三藏と言ふ。

その三藏が一通り說かれたのを『藏教』と言ふ。深入りしない、極くザツと說かれた。即ち小乘の教です。それからそれより進んで言へば、この初めの者にも、モツト深入りした者にも、兩方に役立つやうな教をお說きになる、これが『通教』であります。通といふのは、初步の者にも深入りした者にも兩方に通じて、どちらにも役に立つやうな教の說き方です。それからモツト進んで言へば『別教』、別といふのは本當の大乘の教であります。實際菩薩の行を勵んで、世の爲、人の爲に力にならうといふくらゐな決心をした者に對して說かれる教。それから『圓教』といふのは、圓は完全無缺といふ意味で佛樣の御自分で信じて居らつしやる事を、その事をその儘包まずに打明けてお說きになつた教、斯ういふので、

藏・通・別・圓の四教といふことを申します。

併ながら經典といふものは、その一つの經が藏經か通經かといふ詮索をしても、それはきまらないのです。例へば阿含經といふものは小乘だと言つても、阿含經の中にやはり菩薩の行のやうなことが說いてある。華嚴經は大乘だと言つても、華嚴經の中にやはり自分の欲を捨てろ、自分の我儘を無くしろといふことが說いてあるのだから、お經を一つ持つて來て、この經は大乘か小乘かと言つてもそれはきまらないのです。小乘の經の中に大乘の意味も說いてあるし、大乘の經の中に小乘の意味も說いてある。これはモウ當然のことであります。己れを愼しまずして人を敎へることは出來ませぬし、又人を敎へようといふ大理想が無くて己れを本當に愼しむことも出來ないのでありますから、小乘の中に大乘が說かれ、又大乘の中に己れを愼しむといふ小乘的の事を說かれるといふことは當然なことである。

それだからその經が、どれが主になつて居るかといふことに依つて、大乘小乘をきめるのでありますが、併ながら法華經といふものは何處を見ても佛樣のお心持をその儘に打明けられたものであるから、それで法華經のことを『純圓』と言ふ。純粹に圓敎ばかりだといふので、これは支那の天台大師の言葉でありますが、法華經を純圓の敎だと言はれて居ります。これはどんな低い事を說かれても、佛樣のお心持といふものは歷々と現れて居るから、そこで法華經は純圓の敎、一字一句を見ても佛樣の心持を酌取ることが出來るといふので、純圓と申します。併ながら法華經以前に於ても、或る所では佛の御自分の心持を打明けられた事柄もあり、或る時は菩薩の行を奬勵された所もあるのであります。

その事をこゝに申すのであります。別・圓の二敎といふのは、方等經にも般若經にも說かれて居るけれども、それは華嚴經の中に說かれた別・圓の二敎の意味より以上に出て居ない。言換へれば法華に來ないまでのいろ〳〵な經典は、華嚴經以上に何も出て居ないのであります。

彼の別圓二敎は敎主釋尊の別圓二敎にはあらず、法慧等の別圓二敎なり。此等の大菩薩は人目には佛の御弟子かとは見ゆれども、佛の御師ともいひぬべし。世尊彼の菩薩の所說を聽聞して、智發して後重て方等・般若の別圓を說けり。色もかわらぬ華嚴經の別圓二經なり。されば此等の大菩薩は釋尊の師なり。華嚴經に此等の菩薩を數へて善知識と說かれしはこれなり。善知識と申は、一向師にもあらず、一向弟子にもあらずある事なり。藏通二敎は又別圓の枝流なり。別圓二敎をしる人必ず藏通二敎をしるべし。

方等・般若等の別圓二敎は、お釋迦樣が特別にお說きになつた別圓二敎といふ譯には行かない。一番初めに法慧とか功德林といふやうな菩薩の說いた別圓二敎を、又繰返してお釋迦樣がお說きになつたといふくらゐなものである。だからこの法慧とか功德林といふやうな菩薩達は、チョット人が見ると、お釋迦樣のお弟子のやうに見えるけれども、能く考へれば却てこの人々がお釋迦樣の師だと思はれても宜い譯である。何故ならお釋迦樣が何もお說きにならない前に、これ等の菩薩がそんな深い事を說いて居るのでありますから、お釋迦樣の先生と言つても宜いくらゐなものである。さうしてお釋迦樣はその法慧とか功德林といふやうな人の說いた事を聞いて、それから思ひ立つて、却て方等・般若等の經典に於て菩薩の行を說いたり、佛樣の境界を說いたりして居

らつしやる。それ故に方等・般若等の經典の中に說かれて居る事は『色もわからぬ』少しも違はない、華嚴經に說かれた別圓二教を繰返されたに過ぎない。それ故にこれ等の菩薩はお釋迦樣の師だと言つて宜しい。だから華嚴經の中にお釋迦樣がこれ等の菩薩の事を言つて『善知識』、自分に眞實の智慧を與へて呉れるところの善き友達である。『知識』といふのは友達といふこと、自分に本當の教を與へて下さるものだと言はれて居る。善知識といふのは師でもなければ弟子でもない。友達であつて、常に自分に善き教を與へて呉れる人のことを言ふ。

斯ういふ譯であるから、華嚴といふものは非常に深いもので、その華嚴の中には、お釋迦樣よりも寧ろ他の世界から來た菩薩達の方が先輩のやうに見えて居る。

華嚴でもその通り、況して藏通の二教、即ち華嚴よりモツと低いところの小乘の教とか、或は大乘の入り口のやうな教は、別教といふ所謂大乘の教の枝流である。大乘の教の枝葉のやうなものである。だから別圓といふ大乘の教を知つて居る人は、必ず藏通といふ小乘の教や、或は大乘の教の入り口ぐらゐの事は皆知つて居るに相違ない。だから若し法華經を說かれないで終つたならば、お釋迦樣が一切の菩薩の師だといふことは誰も言はない譯である。

人の師と申は、弟子の知らぬ事を教たるが師にては候なり。例せば佛より前の一切の人天外道は二天三仙の弟子なり。九十五種まで流派したりしかども三仙の見を出ず。教主釋尊もかれに習傳て、外道の弟子にてましませしが、苦行樂行十二年の時苦・空・無常・無我の理をさとり出てこそ、外道の弟子の名をば離れさせ給ひ、無師智とはならせ給しか。又人天

も大師とは仰まいらせしか。

何故なら人の師といふのは、弟子の知らない事を教へるものである。例へばお釋迦樣のお出になる前の一切の人間界・天上界の外道は、この開目鈔の初めにありました『二天三仙』天上界の二人の勝れた神樣と、婆羅門の中の三人の勝れた學者といふものに就いて教を受けた、その二天三仙の弟子である。又その婆羅門教といふものは九十五種までも分れたけれども、幾ら分れて見たところが三仙といふ三人の勝れた學者以外に出ない。お釋迦樣も前には婆羅門の教を習つて、外道の弟子であつたのだけれども、苦行樂行を十二年も積んで、その結果苦・空・無常・無我といふ理を覺つて初めて御自分獨特の覺りをお開きになつて外道の弟子といふ名前を免れたのである、さうして『無師智』自分は師が無い、自ら本當に覺つたのだといふことを仰しやつた。だから人間界・天上界の者も、成程お釋迦樣は勝れた方である、獨特の覺りを開いた方だと言つて皆これを仰ぎ慕つたのであります。

そこで『苦・空・無常・無我』といふことでありますが、

苦
空
無常
無我

これはテウ深い教ではありませぬけれども、佛教と婆羅門教との境を明かにする爲に、この四つの點を注意すべきでありますから、一通り申上げます。

『苦』といふのはたゞ苦しいといふ意味ではない、不滿足といふ意味であります。これはマア佛教の入口であります。不滿足といふのは、吾々が道も教も知らないで、たゞ成行に從つて世の中に生活して居るならば、どんな境界に居ても滿足はありはしない

といふことです。これを一番初めに教へるのです。それは實際その通りです。金の無い者は金が儲かれば滿足だらうと思ふけれども、儲かつた人は儲かつた人でやはり苦しい、身分の低い人は出世すれば滿足だらうと思ふけれども、出世して見れば、周圍から憎まれたり嫉まれたりしてやはり苦しい。子供の時には大人になつたら宜いだらうと思ふけれども、大人になればやはり苦勞が多くて、子供の方が宜かつたナと思ふ、といふやうなものですから、人生の境遇に依つて與へられた事だけを考へれば、如何なる境遇、如何なる地位に居つても滿足はありはしない。この事を本當に教へるのが苦といふことであります。それが解らなければ、信心をしたいの、教を求めたいのといふ氣にはならないのです。どうもつまらないナと本當に思ひ詰めるから、このつまらない人生を脱する教を求めるのでせう。そのつまらないといふことを本當に思ひ詰めることが、實を言ふと難かしいのです。つまらないと思ふけれども、又何とかなるだらうと思つて、自分で自分を妥協してしまふから、結局眞實の教を求めることにならない。本當に不滿足だといふことが解れば、どうしてもヂッとして居られませぬから、自然に教を求めることになる。それが苦といふ教であります。

それから『空』といふことは、これは差別は不徹底だといふことを教へる。人間の附ける差別といふものは徹底的のものではない。上だの下だのと言つても、その上下が本當に徹底的でない、人の上に立つて居る人が下の人に見られても恥かしいやうな事を隨分やる。人に尊敬されて居る者が、尊敬するに値しない事を隨分やる。だから人生の差別といふものは不徹底であります。上だと言はれる人が、つまらない下の者に及ばない事をやつて見たり、利口だといふ人が、馬鹿な人も嘘ふやうな事をやつて見たりして居るのが人生の常でせう。であるから人生の

差別といふものは要するに不徹底です。本當に佛樣の教を學んで信心をしたならば、それは徹底的に眞劍なものになれやうけれども、普通の人生の差別といふものは極めて不徹底のものである。これを教へるのが空といふことであります。

それから『無常』といふのは、これは言ふまでもない。世の中の人の美んで見たり、求めたり、吝んだりして居ることは無常であります。永く續きはしない。金が有るといふ人がいつまで有るか、やがて貧しくなるだらうし、身分の高いといふ人がいつまで續くか、妻の美しいといふその美しさがいつまで保てるかといふことを考へれば無常であります。これは別に說明を要しない。

それから『無我』といふのは、これは天地自然の出來事を司るところの宇宙を創造したる神といふものは認めない、それが無我といふことであります。この無我といふことはいろ〳〵な意味に使ひますが、この場合ではさういふ意味であります。基督教のやうに神樣が一人在つて宇宙を創造したといふやうなことは、佛教では認めない。婆羅門教に於ては、帝釋天の肩から出たのがどういふ人間だ、足から出たのがどういふ人間だと言つて、帝釋天を一種の造物主のやうに見て居りますが、佛教ではそれは認めない、佛教は自然にこの大きな力が發展して總ての物になつたので、總ての物の發展は自然の因果の關係だといふのであります。宇宙を造る神ナンといふものは認めない。これが無我であります。

斯ういふやうにして苦・空・無常・無我といふこの四つの點に眼を着けたといふことは、所謂婆羅門の教に無いことであつて、初めお釋迦樣は婆羅門の教をお受けになつたけれども、その婆羅門以上に出て斯樣な覺りを開かれたからこそ、初めて佛教といふものが、そこにしつかりした根抵を有つて、さうして一切の人がこれを師と仰ぐやうになつたのだとい

ふ、斯ういふことを一通りこゝに述べられるのであります。

けれどもまだ〳〵法華經を說かれない間には前にも申すやうに華嚴經の初めに於て他の菩薩達が出て來て、お釋迦樣の仰しやらない前に隨分深い敎などを說いて居るのだから、まだ〳〵お釋迦樣の本當の尊さは現れない。然るにこの種々な經を說いて後法華經に至つて、而も壽量品に至つて、本佛といふものを說き現して、本佛の現れたのがお釋迦樣でお釋迦樣は際の無い昔から際の無い後までこの娑婆世界を護つて、娑婆世界を導く方だといふことを打明けられた所から見ると、華嚴經の時にお釋迦樣に先つて敎を說いたといふその菩薩達が、やはりこの久遠の本佛の現れた一部分に過ぎないナといふことが解りましたから、そこで初めてこの久遠の本佛が佛と名乘つて下さつたお釋迦樣の敎といふものが絕對のものとなるのでありまして、この絕對の敎に絕對に歸依する、斯ういふことになつて來るのであります。だから法華經が說かれない前の佛敎といふものは、まだしつかりした根抵を有つたものでないといふことになるのであります。

〔第十九講了〕

受持成佛

はしがき

人としての最高の理想は、實に佛道を成滿するにあると思ふ。佛道とは單なる解脫門を指すのではない、迷を轉じて悟を開く、苦の人生を解脫するといふ丈けならば、世間とは沒交涉な獨善的なものであつて、そんな人が幾千萬人出來ても、國家社會の上からは有難いといふ感謝の念は起らない。佛陀の敎は、阿含の小乘敎から旣に『我は度世の要道を說く』と仰せられ『無濁歡悅』の社會たらしめんとされて居る。それが經王法華に來つて徹底的に上には菩提を求め、下には大衆を化導せんとする誓願となつて利他共利の菩薩の六度及び慈・悲・喜・捨といふやうな實際問題に立入つて、個人としては安穩の樂、世間の樂及び涅槃の樂を得、國家に對しては立正安國の運動となり、世界人類の樂土をこの地上に建設せんとするものである、全法界の成佛化である。あまりに雄大な理想であり、深遠な敎法である爲めに思想の低い者には充分理解されない、恰度胃腸の弱い者が、滋養物を與へられても吸收されないやうなものであらう。經文には『佛と佛とのみ乃し能く究盡したまへり』とあつて、佛になれば始めてお互に合點出來るといふことなんであるが、その佛の境地に達するにはどうすればよいかといふ時に、吾等の爲めに信を以て慧に代ふといふ信心の一行が與へら

礒部滿事

れて居ることは實に有難い事と思ふ。

佛道修行が幾多にも岐れて居るやうに見へる、たとへば念佛とか、座禪の方が高尚だらうと思ふ人もあるが、之を押し究めて行けば最後は妙法蓮華經の信唱となるので、『信力の故に受け、念力の故に持つ』と先哲も仰せられて居る。『受くるは易く持つは難し、さる間成佛は持つにあり』と日蓮聖人も誡告された。

受持成佛といふことが、唯に文字の上丈けでなく日蓮聖人の論法として、道理、文證、現證と、この三つ離すことは出來ない。その現證を最近に得た悅びを爰に略述して、いかにも經典や、御書の貴い事實に深い感激を新にする者であります。

堀江夫人を憶ふ

上野廣小路に四階建で、東京名物池の端酒悅福神漬といふ看板のある店舗がある。この福神漬は成る程東京名物丈けあつて、獨特の味を、不忍池の蓮花と共に誇つてゐる。世間で名物にはうまい物なしなどいふけれども、岡山の吉備團子や、姫路の玉椿などはどうしても天下一品である如く、この酒悅の福神漬も全國的に比肩すべきものはあるまい、それは店主故堀江宣篤氏の苦心研究の報である。獨り宣篤氏丈けでなく、その夫人が貴い犧牲の產物である。

さて宣篤氏が一昨年春病逝されたが、その少し前から夫人は、池田新一氏の導きで御嶽教から進んで本國に結緣され、始めて本多上人の尊影に接せられた時、それが不思議にも夫人の祖父に甚だ克似されてゐると深い感激を湧起されて居たが、其の信心の增進は洵に鮮かなものであつた。而して自分丈けが讀經唱題修行に專念たるばかりでなく、外に對つて同心會といふ信仰團體をば、池田氏を援助して產みの母となり、妙法華の精神に基いて各自の身心鍛錬に資し、異體同心以て立正安國の實を擧げてほしいと激勵されて、若い青壯年の前途に多大の關心を拂ひつつ、毎月三回宛酒悅ビルの四階を提供されて、精神的にも物質的にも奉仕されるのみならず、店員の人達に對しても、其の品性の向上を促がす爲め、酒悅青年團を組織せしめて、毎月十八日の公休日には午前の半日を信仰修養に資せしむる等、菩薩の願行を奮くべき勢で精進されて居た。何といつても教化運動は、宗教の正しい信仰に迄來ねば活きた用にたゝぬ。

御主人を喪ひ、品物の製造から、店の經營から、子女の教養等幾多頭腦を煩はすことが多かつた爲めか、昨夏腦溢血で一時人事不省に陷り甚だ危險であつたが、幸にも佛樣の加護と、醫師の手當がよろしかつたので、一月も經ないのに起きあがる事も出來るやうになり、其後二三ヶ月せない間に殆んど全快された、これは寧ろ不思議の現象であるまいか。

處が本年の正月不圖流感の襲ふ所となり、一進一退で駒込の自邸に於て病床に親まれて居たが、三月の中旬頃からは殆んど平常に復し、四月に入つて彌元氣に向はれモー締めたと思つた刹那、又復發熱し神經痛が起つて息苦しい狀態となると共に、心臟の故障を來たした。實に諸行は無常である、昨日の健康も今日は誇りとならぬ。あの頑健の小西上人を偲び、今この夫人の上を見て益々讃うたるゝ次第である。

十三日の朝重患の電話に愕いて馳せ付けた時、悲しい哉死相が現はれて居た、何としたことであらう。夫人は御本尊を拜しつゝ横臥されたまゝ、靜かに南無妙法蓮華經と御題目を唱へられて居る。純信の池田氏が唱題の間に、夫人に力付け將に逝かんとする心を引戻さうと一切の要件を放擲して、專ら至誠を捧げて看護される姿は涙ぐましい。信ずればこその感を如實に示されて居る、事實は無言に大きな教を垂れる、池田氏の態度に無關心の者はない、周

圍につどふ誰れ彼れの別なく、所謂異體同心に御題目が和唱されて居た。

最後の活訓

翌十四日、朝よりも晝、晝よりも午後と、刻々に惡化する、最早醫師の力も及ばなくなつた。苦痛も去つて安かな、而して輕く兩眼を閉ぢ、口ばかり動いて「南無妙……法蓮華……」經の聲は微かに響く此上は、本佛釋尊の御手に縋ることである。午後四時頃から池田氏は眞劍に題目三昧に入り、自分も五時頃かけ付けて力のかぎり熱唱した。六時七時の頃には枕頭に侍る十數名の口から徐々お題目の聲が出る、そこには神道の人もあつた、念佛の人もあつた無信の人もあつた。併し此場合何等の遠慮なく、益益强盛に唱へ續けて、別に夫等の人々には勸めもせなかつたが、期せずして南無妙法蓮華經の梵音が、一音毎に加はつて、遂に全部の人、一人も漏れなく感冒で咽喉を痛めて居らるゝ方さへもが、和唱され極めて森嚴な光景を現出した。

夫人の顏色は微かに紅潮し、輝いてつや〳〵しくなつて見えた、口から出る題目は「南無……」は聞へるが、あとは口の動き丈けであつた。八時頃には殆んど聲は聞へず僅かに口の動きで和して居らるゝことが知れる。時として呼吸が停止し始めた、醫師が搖り動かすと、ハッとして呼吸が續く、暫くすると又怪しくなる數回これを繰返した……。靜かに瞑目されたまゝ何等苦悶の相なく、身は微動だもせず百日の臥床であつても食事は普通に攝つて居られたから、何等病人らしい衰弱の樣子も見えない、肥滿のまゝ潑剌たる顏色に、これが臨終の人かと疑はしめられる。併し事實はどうにも致方ない、彌々最後の場面が來た、それは丁度赤坊の眠るやうに音もなくスーッと呼吸は絶えた。いくら搖つても、動かしても何等の反應はない。御寶前に恭しく自我偈の法味が捧げられ、波木井抄の一節が讀まれた。アゝ世間では死の苦しみといふが、夫人には微塵も苦痛はなかつた。即ち一同の唱題裡に自分も唱へ、唱へて唱へぬいて安祥として靈山に往詣された。行年四十九歲。時は正に十時。その口邊に微笑を含みつ、顏色も一般病死の如き蒼白でなく、櫻色を帶びて生前にも勝る。……是の相は四日後の送葬當日に於ても些少の變化がなかつた、そこに眞の歡喜はある。

日蓮聖人弘安元年身延山より駿河の妙法尼に給ひし御返事中に、

今の御消息に云く、生きて候ひし時よりもなほ色白くかたちも損せずと云云。天台の云く、色白は天に譬ふ。大論に云く、赤白端正なる者は天上を得る云云。天台大師御臨終の記に云く、色白し。玄奘三藏御臨終を記して云く、色白し一大聖教を定むる名目に云く、黑業は六道にとどまり、白業は四聖となる。此等の文證と、現證を以て勸へて候に、此人は天に生ぜるか、將又法華經の名號を臨終に二反となうと云云。法華經第七の卷に云く、我が滅度の後に於て應に此經を受持すべし、是の人佛道に於て決定して疑ひ有ることなけん云云。一代の聖教いづれもいづれもおろかなる事は候はず、皆我等が親父大聖教主釋尊の金言也、皆眞實也、皆實語也。……法華經の名號を持つ人は一生乃至過去遠遠劫の黑業の漆變じて白業の大善となる。況や無始の善根皆變じて金色となり候なり然れば故聖靈最後臨終に南無妙法蓮華經と唱へさせ給ひしかば、一生乃至無始の惡業變じて佛の種となり給ふ、煩惱即菩提、生死即涅槃、即身成佛と申す法門なり……。

夫人の最後に就て猶二三の奇瑞はあつたが、あまりくど〳〵しいから略する。慥かに夫人の佛果を成ぜられた事を確信して、悲しかるべき最後の幕が、

周圍の人々をして隨喜讃歎せしめ、無言の大きな教化を垂れ、家族は勿論、一同の發菩提心に一段と拍車をかけられた次第であつた。

佛陀の慈念

妙法蓮華經如來壽量品に、釋尊は、

今實の滅度に非ざれども、而も便ち唱へて當に滅度を取るべしと言ふ。如來は是の方便を以て衆生を教化す、所以は何ん、若し佛久しく世に住せば、薄德の人は善根を種えず、貧窮下賤にして五欲に貪著し、憶想妄見の網の中に入りなん。若し如來常に在つて滅せずと見れば、便ち憍恣を起して厭怠を懷き、難遭の想、恭敬の心を生ずること能はず。

と、このお經文と、今の夫人の最後とは實に不離の感がする、矢張りこの大宇宙の一切は本師釋尊の圓慈海中にある事を切實に體驗せしめられる。親を喪ふことは最大の悲しみであるが、又子としては爰に憤然として蹶起し、一大志願力を以て努力するに至る、寔に有難い事で自ら合掌唱題せざるを得ない

夫人の歿後四日を經た十七日の午後、駒込の本邸に於て、從來神式であつた葬儀を、故人のお志を尊重し、且つ池田氏の篤き孝養から、斷然顯本の最高式典に依つて營まれた。

その時、夫人の力を入れられてゐた將來ある同心會が、いかに追慕して居たかは、當時の弔辭にも溢れてゐる。曰く、

人生の無常なることは常に聞く處でありますが

今堀江御母堂とお別れするに當り轉た感慨無量で御座います。

御母堂樣には御自身、寔に純眞無雜な顯本法華の信者でありました。のみならず同心會に對しては獻身的に御盡し下されたのであります。曩に本會結成の企に就ては其邸宅を開放して講演の席に充てられた許りでなく、物質的にも精神的にも本會の主柱であられたのであります。

願みれば、昨年の夏、腦溢血を患はれましたが御靜養の結果醫者も驚く良好な成績で、幾許もなく御全快になりました。然るに本年正月、流感に冒されましたが、經過よろしく最近は庭園にも出られ洵にお元氣の樣に漏れ聞いて居りましたが、不計も數日前又復お風を召したのが因で餘病を併發し、今月十四日午後十時急逝せられたのであります。

惟ふに人の一生は、其の最後の息を引きとる五分間が最も大切であります。御母堂樣の御臨終は極めて御立派な模範的のものでございました。此の意味に於て我々は又と得難い最後の御教訓を與へられたのであります。

我々同志はこの御教訓を深く心に刻み、益々佛道修行に精進せむことをお誓ひする次第で御座います。

御母堂樣の御他界は、申す迄もなく誠に悲痛哀情に堪へぬ次第でありますが、併し一面には法華經の功德を身を以て示されたものといふべく同志一同は感激措く能はぬものがあります。

御母堂樣の御精靈は、今や臨終を期して靈山に往詣し、速かに常樂我淨の佛身を成就せられたことであると、微塵も疑はぬ次第で御座いますは茲に最後のお別れの言葉を捧げます、どうか哀愍御納受あらんことを。

南無妙法蓮華經

昭和十三年四月十七日　　同心會

同心會猛者三十名の哀情が切々として現はれ、而して遂に此の日、來るべき三七日忌迄の二十日間前後毎晩繰合せの出來る連中で、追善の修法を營みたいものだと自發的に申出でがあつた。想へば御佛の

慈悲の御手は何と有難いではないか、思はず涙がこぼるゝ。佛子なればこそである。同心なればこそである。社會が皆この氣持になり、國と國とが不輕禮拜の行に來ねば眞の寂光土は顯現されないであらう。今一息の大努力を門下の人達は要する。釋尊最後の教敕は『我今現在せり、大衆和合せよ』の御言葉であつた。宜しく私心を去つてお互が協力し奮起する所に、理想は實現化するであらう、現實を離れないでその中に最高の理想を導いたものが妙法華經の權威である、蓮華の譬は明かに之を示されてゐるでないか。起てよ血の燃ゆる青年士女！　汝の懷の珠を輝かせ！　師子王の心して！

むすび

近來日本國教大道社の復興を叫んで川合清丸全集を頒布して居るが、其趣旨は『我國の精神は神儒佛の三道なり、三道合して大道と謂ふ。君に忠し國を愛するは神道より善きは無し、世道を經綸するは儒道より善きは無し、煩惱を解脫するは佛道より善きは無し。昔、先王此の三道を調和し以て國教と定め給ふや舊し』云云。これ表面的にはよい樣に見ゆるが、その內容に入る時に、先王の神儒佛三道を我が文化に斡系づけられたのは、三道の單なる併立合一ではない筈である。この神儒佛三教の精髓を融合し以て開顯統一され、そこに貴い信仰の實行に移つて居るのである。三教を理論扱して居る間は未だ國民を引導するに足る權能は發揮されまい、國民どころか自分自身が救はれて居ないではないか。自分が泳げないでは、溺れる人は救へまい。見よ、聖德太子は申す迄もなく、道眞公にしても、親房卿でも、光圀卿にしても皆金剛不壞の妙法華經信仰に依つて合掌し、讀誦し、書寫し、禮拜されて居るではないか妙法蓮華經といふことが、お經文だと考へて居る間は、佛教を眞に理解されてない證據である。末法の大導師である日蓮聖人に聞けば『妙法蓮華經の五字は經文に非らず、其義に非らず、唯一部の意ならくのみ』更に『妙法蓮華經とは一切衆生の佛性』とも『妙法蓮華經は一代の觀門を一念に統べ、十界の依正を三千につづめたり』又『妙とは天台玄義の一に云く言ふ所の妙とは不可思議に名くるなり、又云く、秘密の奧藏を發く之を稱して妙と爲す、又云く、妙とは最勝修多羅廿露の門なり故に妙と言ふなり。法とは、又云く、言ふ所の法とは十界十如權實の法なり又云く、權實の正軌を示す故に號けて法と爲す。蓮華とは又云く、蓮華とは權實の法に譬ふるなり、又云く、久遠の本果を指し之に論ふるに蓮を以てし、不二の圓道を會し之に譬ふるに華を以てす。經とは又云く、聲佛事を爲す、之を稱して經と爲す』とも仰せられて我等衆生は皆妙法界中に生々死々して居る。それが信仰の側からすれば、此の妙法蓮華經は主師親三德具備の久遠常住本佛釋尊が、無始已來積まれた因行果德の具足せる即ち色香美味の是好良藥であるが故に、之を口唱受持する處に自ら其功德を讓り與へられて、釋尊と等しく成佛することが出來るのである。所謂受持成佛である。嗚呼嬉し哉、有難い哉。

日蓮聖人の如說修行抄結文に、

命のかよはん程は、南無妙法蓮華經　南無妙法蓮華經と唱て、唱へ死に死るならば、釋迦・多寶・十方の諸佛、靈山會上にして御契約なれば須臾の程に飛び來て手をとり、肩に引懸て靈山へはしり給はば、二聖・二天・十羅刹女は受持の者を擁護し、諸天善神は天蓋を指し、旛を上て我等を守護し慥かに寂光の寶刹へ送り給ふべき也。あらうれしや、あらうれしや。

此書御身を離さず常に御覽有るべく候。

南無妙法蓮華經

——一三、四、二〇——

佛教に關する作法

來馬琢道

序言

宗教に關することは餘り理論を述べない方がよいといふのが、我々の傳統的慣習であるから、大抵の事はおのづから承知してゐるだらうといふ考へで、餘り教育しない傾向があつた。然るに、時勢は急激なる變化を示し、昔から家庭的行事の指導者であつた老人は、青年及び少年を指導する力を失ひ學校に於いては、この方面の教育を施さず、しかも社會的には宗教的行事が相當に廣く行はれてゐる。從つて、もう少し注意すれば短時間で濟むことをわざ〳〵長時間を費すやうなことになる。而してこれを行つてゐる人々も、何等の根本的知識がなく、たゞ人が行ふから我も行ふといふ程度で、その日暮しの行事を勤めてゐる。これは生活改善運動の相當重要たる領域であらうと思ふから、今二三氣のついたことを述べよう。

一、燒香の方法

佛教の儀式に於いては、如何なる場合にも燒香を行ふ。尤も燒香といふことは、佛教の儀式に限つたことではなく、昔は室内に芳香を漂らせるには香木を焚く外に道がなかつたのであるから、貴人の生活には燒香といふことは缺くべからざることゝなつてゐたやうである。

かつて新聞紙上で見たのであるが、貴族院に於いて、帝國議會の開院式が行はるゝにあたり、天皇陛下が貴族院に親臨遊ばされる時に、熱した鐵器の中に香水を注いで議場に芳香を漂らしたといふことである。今なほこれが行はれてゐるか否やは承知しないが、これは多分西洋の式によつたものであらう、わが國に於ける御即位式の節、紫宸殿の前に於いて香を焚いたことは、明治史の上に掲載されてゐる。

かつて、予が印度を巡回した時に、或る富豪の家を訪問したら、先づ花輪を首に掛け、次に香水を掌に一二滴落してくれて、その手で顏を撫でると、スツカリ炎熱の中を歩いて來た疲れを忘れたといふ接待振りに遭つた。熱帶地に於いて好い香を嗅ぐことが貴人の生活に最も必要なことは、この一事を以て知ることが出來る。故に燒香は佛教特有のものではないが、今日では個人の携帶する香料は香水となり、室内の空氣を淨化するには種々文化的方法を用ひることになつて、燒香は恰も佛教の儀式の如くになつてしまつたわけで、佛教の儀式に參列する者は、一應燒香の由來を承知しておくべきである。

近來葬儀や法要に行つた者が必ず三回宛香を取つて香爐に投ずるのを例としてゐる。予は各種の葬儀に參列する便宜を得てゐるので、常にこの點に注意してゐるが、何人も必ず三回行ふこととしてゐる。これに就いては、東京市役所で發行した書物の中に、丁寧に香を三回焚けと指南してあるのが元といふわけでもあるまいが、誰も三度焚かねばならないことと思つてゐる。これが實は燒香を受ける方に取つては相當の苦痛である。一回でよいものを三回焚くので、非常に時間が掛る。本人はわづかに十秒か二十秒であらうが、三百人の會葬者があるとすると、一時間四十分を要することになる。三つの香爐を設けて置いても、三十三分を要することになる。若しこれが一回で濟めば、一つの香爐で三十三分で濟む筈であるが、三度宛香を焚くために、一時間四十分を要する。一教の告別式に於いては、左側から進んで燒香をなし、右側を通つて歸るを例とする——さうしなければ、兩側に立つてゐる人の答禮を受けることも出來ず、また往復の人が途中で衝突する惧れがある故に三つの香爐を設けて置いても、實は一つ半くらゐしか能率が上らない——即ち三百人の會葬者が三度宛香を焚くために要する時間は、四十九分强であらう、香爐を五つ設けて置いても、能率はさほど上らないのが實情である。御本人はそれでも誠心籠めて弔意を表したつもりで滿足であらうが、後から續いて來る人々は非常な迷惑を感ずる殊に暑い時や寒い時には、屋外で待つ次第だから、葬儀を取扱つてゐる者に取つては、相當苦痛の種である。然らば何故に三回焚くかといふに、これは多分僧侶が線香を三本立て、または香を三回焚くことを見てゐた者が、理論を究めないで宣傳した結果であらう。僧侶が本堂に進む時に三本立てるのは、佛法僧の三寶に捧げるのである。簡單にいへば、佛は教祖であり本尊である。法とは教祖の說かれた教へであり佛教に於いて最も大切な寶である。僧は教祖の教へを長く傳へて來た祖師方であるから、これも亦大きな寶である。故に如何なる場合は於いても、本堂に參る時には佛法僧の三寶に香を捧げる、これが線香を三本立てる精神である。それでその方が終つてから、一人の精靈のために立てる線香は一本と定つてゐる。香を焚くにしても同樣で、佛法僧の三寶に捧げる時は三回焚くが、そのために僧侶が燒香する時には一回でよい事になつてゐる。その前の方の儀式が多分燒香三回といふ慣習を作つたものであらう。然らば佛教徒は常に香を一回しか

焚かないかといふと、時に二回焚くことがある。それは檢香と從香といふ場合である。

檢香といふのは、若し火がなければ、折角の香もよい匂ひを發しない。仍て香爐中に火が有るか無いかを檢査する必要がある。手を當てて見れば火が有るか無いか解る筈であるがよい香を焚く時の火は、少しく灰の中に埋めて柔かに香に火が移るやうにするのが理想的焚き方である。仍て火箸を以て灰をのけ、直接火に高級の香木を焚くといふよりも、灰の上から火の有る無いを檢査する必要がある。この場合に於いては、比較的安い香を取つてその灰の上に載せて見る。暫くすると、下の火がその香を燃やすので、煙が上つて來る。そこで火があることが解るから、安心して上等の香木を香爐の中に投ずることになる。これは香道に於いてもある筈であるが檢香といふのがこの意味に於いて正式の作法となつてゐる。次に從香といふことがある。これは大和尙が大法要を行ふ時に香を焚く——今上天皇陛下の聖壽萬歲を祈る時にも、香を焚いて誠意を示すのである——斯る場合には、鄭重なる儀式を行ふのであるから、前にいつたやうに、試驗的に香を焚き煙が上るのを待つて香木を投ずるといふことは不作法になる仍て法語を唱へて直ちに上等の香木を香爐の中に投ずる。若しこの場合に於いて、爐中の火が香木に屈かないといけないから、そこで侍者が側にゐて、比較的燃え易い香を添へて焚く。これを從香といふのである。即ち大和尙の爐中に投じた香は、沈香のやうな堅い香木であつて、俄に火が移らない惧れがあつても、侍者の投じた柔い香で火を導いて容易にその堅い香木を燃やすことが出來るからこの式を行ふ。この二つの機會に於いては、香を二度焚くことになる。これ等の作法を見てゐた人々が、或は一度では滿足しないやうになつたのかも知れない。何れにしても、香を一度以上焚くのは特別の儀式であつて、一般の人は一回焚けばよいのである。二度三度焚く習慣は理論上からも、實際上からも遠慮すべきである勿論閑室にあつて、或は經を讀み、或は經を寫し、或は坐禪を爲し、或は修養の書を繙く、斯る時に香の薫りが絶えればまた引續いて香を焚くのは一向差支ないことであるが、何百人の會葬者が後から詣へてゐるのに、平然として三度焚いて居られるのは公德上よくないことである。故柳澤伯爵は予と萊府會に於いて屢懇談したが、或る時、この話を聞いて深く感心し、爾來必ず燒香は一遍にしたと斷言せられた。その他予の交はつてゐる人で、この說明を聞いて一度にした方が大分あるやうである。生活改善の上から先づこれを實行することを希望する。

實は十數年前から、私の寺では葬儀の節これを大聲で警告して見るが、會葬者の大部分はこれを聞き容れない。俺が好きでやるのを何故僧侶が干涉するのかといふ態度で、丁寧に三遍燒香して行かれる。その人の氣持はよくわかるが、公益のためにこの事はぜひ守つて頂きたい。然らば二靈または三靈の時は何うするかといへば、何靈あつてもその日は合同稱に敬禮する精神であるから、一回でよい。

二、燒香の順序及び敬禮

佛敎の儀式に於いては、導師が燒香を爲して三寶に供養し志す所の精靈に供養し、式が終つてから第一に喪主、近親一般、親戚、友人總代、次に一般參列者に燒香して貰ふことになつてゐる。尤もこの間に舊家ならば、宗族または、宗家の主人に燒香して貰ふこともあり、會社の社長がこれに代るべき重役等に燒香して貰ふこともあるから、その邊は葬儀委員長が各方面の事情を參酌して燒香順を定むべきである。

式の精神からいへば、卑親族が燒香し終つてから、尊親族は後から燒香してよいわけである。例へば、子女の葬儀に父母は卑親族の燒香が終つてから徐ろに燒香する如きである。併し世間の事情は幾分かこの間に參酌を要するものがある。即ち喪主夫婦の次に未亡人を加へ、未亡人の實家の主人を加へ、喪主の妻の同胞を加へることもあらう。これは葬儀委員の極めて明快なる頭腦で判斷しなければならぬことゝ思ふ。

次に燒香の時の敬禮であるが、從來の燒香法は燒香机の三歩ほど前で敬禮する。これは導師に向つての敬禮である。何んとなれば、その日の導師は御本尊の名代であり、式場の代表者でもあるから燒香する者が敬意を表するのである。次に膝行して香を爐中に投じ丁寧に敬禮する。これが靈位に對する敬禮である。すなはち立つて廻れ右して退出するのが一定の作法となつてゐる。然るに近來燒香する者が彼方にも此方にも敬禮する風を生じて來た。それは施主が會葬者に向つて敬禮し、導師に向つて敬禮し、それから靈位に向つて燒香し敬禮する者もあれば、親戚が喪主に敬禮し、會葬者または參列者に向つて敬禮し、次に靈位に敬禮する類である。そのために費す時間も要し、またこれに答禮する者も隨分煩雜で困る。元來その日の目的とする所は靈位にあるのだが、導師の前を横切る時には導師に敬禮して直ちに廻れ右をして靈位の前に燒香し、敬禮すれば宜しく、本尊の方に向つて燒香する時には前に云つた式によつて燒香すればよいのである。即ち多くも二拜でよい。尤もこの點に就いては、かつて某女學校の式を見て感じたことがあるが、卒業證書を受ける生徒が校長に敬禮し、右の來賓に敬禮し、左の來賓に敬禮して退下して行くのを見た。これは卒業生總代として謝辭を述べる時に校長及び來賓に向つて敬禮し、それから讀むことになつてゐる式を混用したもので、如何にも煩はしいと思つた。仍て燒香の時の敬禮は、當日の靈位に對する敬禮のみに止め、喪主及び親戚等に對する敬禮は絶對に不要なりと云ふことに確定

しておきたい。時間上の經濟もあり、全く虚禮に失するものである。

三、弔辭朗讀と燒香

前に云つたやうに燒香は導師の次に喪主が第一に行ふべきものである。然るに引導が終つてから弔辭の朗讀を行ふと、弔辭朗讀者が先づ進んで燒香を行ひ、その煙の上に弔辭を翳してそれから朗讀するを例としてゐる。これも東京市役所で發行した書物の中に指南されたやうである。これは不遜の甚だしきもので、その日の喪主が第一に行ふべき燒香を弔辭朗讀者が初めに行ふといふことは甚だしき不作法である。故に弔辭朗讀者は導師の燒いた香の上に弔辭を翳すだけで、直ちに捧讀すべきものである。若し香の煙が絶えてゐたらば、香爐の上に翳すことは略してもよい。この件に就いては、東京府廳の吏員が淺草の公葬の時に、「先日淺草區の公葬に行つた時に、東京府知事の弔辭とのみいつてお燒香といはなかつたから、弔辭だけ讀んで後でお燒香と案内があるかと待ち構へてゐたら、それきりで、知事の燒香と呼出が無かつた。仍て適當の時に燒香して退出したが、若し弔辭捧讀と共に燒香すべきものならば、司會者からその旨宣告して貰ひたい。我々の方では弔辭だけ讀んで燒香は後からするものと定めてゐる」と話つたことがあつた。その東京府の吏員の注意は御尤もである。故に今後弔辭朗讀者は燒香を遠慮し、捧讀だけにしておくべきである。

近來葬儀の節、喪主が式場から出て歸る會葬者に挨拶してゐるのを見受けるが、導師の引導が終り、なほ式の執行中に喪主や關係者が式場を去るといふのは不作法極まることと思ふ。斯る場合、挨拶は他の人に任せて、喪主は最後まで式場にをるべきものである。

最近告別式を行つて葬儀を行はない者が多くなつたが、本來告別式は逝去後遺骸の前で顔を拜んで退出する式で、皇室葬儀令によると、殯宮移御の儀に類するもので、眞の葬儀ではない。葬儀は皇室に於いて行はせらるゝやうに、諸員を參列せしめ、その人々の前で執行すべきものである。弔辭を讀まれても、功績を演說せられても、近親の者ばかり聞いて會葬者に何にも解らないといふ近頃の式典は、葬儀執行の精神に背くものと思ふ。忙しい會葬者の便利を考へて、眞に故人を弔ふ精神を失つてゐることは、日本人の誇るべきことではない。勿論徒らに冗長なる式を奬勵するわけではないから、今少し各會葬者は式典に參列する方法を工夫したいものである。（生活改善）

記事

本部團報

釋尊御降誕會　花咲き匂ふ春陽に、人の心も終に芽を出し、自ら氣も愉快に向ふ十日の日曜日午後二時より、本部講堂を莊嚴して、大聖釋尊の非生現生會を虔修し、訖つて講演會に移つた。

開會に當つて磯部理事は『釋尊と教化の大本』と題して方今國民精神總動員に對し、教化の任に當る世間の人々が、或る者は一方面に偏し、或る者は散漫に流れて四分五裂の狀態にあるやうでは美果を收め難いであらう。貴い高い理想を持つ我國民には、優れた深い明教を與へねばならぬ。日蓮聖人が佛滅度の後、その鳳敕を奉じて神洲に出現し、佛教の精髓を發揚された。その大恩教主の釋尊は中天竺に御降誕遊ばしたが、これ無始常住の本佛釋迦牟尼の每自の悲願より發つた身輪である。從つて生れながらにして七歩前進し『天上天下に我れ獨り三德を極む、三界は皆苦なり、我れのみよく大衆を度脫せん』と仰せられたことに不思議はない。釋尊の明教は一切の思想を開顯統一すべき大本である。此際益々法國の爲め各位の御清授を請ふ旨を述べ、次で上田理事長は三月中旬渡滿、月末に歸京された旅行中專門的のことは避けて、一般通俗的方面の話を一時間あまりされた。その要旨は、時間の關係上飛行機で往復したが、鴨綠江から新京迄の五時間は一望千里、大平野に變化なく厭き〳〵する、併しこの廣大無邊の沃野を眺めた時、誰れでもが此處に發展しなければの感を懷くでしやう。內地の土地は永久に依然として增さないが、人口は每年百萬から殖える。日本民族は大陸に發展して極東十億の民を指導しなければならぬ。露西亞は帝政時代に不凍港を求めんとして、旅順に要塞を築き、日本海から印度洋及び太平洋にも出やうと致しました。骨てハルビンで感じた事は、始は二三人しか居なかつた百姓の寒村に、鐵道を敷設して都會を造るべく計劃した、その最初に丸太を以て造つた教會を一番に建てた。それから他の建物に及んだことは實に將來恐るべき國民だと思つた。其後革命に依り宗教を排除したから今日のやうになつてしまつたのです。

旅順を案內して貰ひ、次で大連に來てある支那人に今度の日支事變に就て話しました。『戰爭をやつて居るね』『やつて居ります』『支那は大分負けて居るね』『大分負けて居ります』と平氣なものです。彼等は誰が支配者とならうと稅金を高くせず、お金を捲きあげられねばそれでよいといつた銳子なんで、國よりは自己本位なんです。

それから滿洲人は、日本人よりも偉大な所を持つて居るのでないかと思ひ

ます。奉天には立派な捨子の養育院がありますが、これは日清戰爭時分の支那の大將が、死ぬ時記念の慈善事業として始めたものださうです、實に廣大な而して完備した到れり盡せりの東洋一といふ誇りを持つてゐるさうです。捨てられた赤ん坊は直ちに看護婦が來て眞白な着物に着換へさせて、準備されたベットに寢かせ、順次養育されます。成人すれば夫れ夫れ男女相應の仕事を與へ、又結婚もさせるのです。こんなに整頓した惠まれた境遇におかれるけれども、彼等支那人は面子を重んじますから殆んど捨子は致しません。一ヶ年二百人位ださうです。然るにこの二三年は捨子がメッキリ增えて來たといふのです、それは日本人の爲めだとは何と淺間しい恥かしい事ではありませんか。これでは日本人だからと威張れない、情けない事です。等々縷述の後、最後に滿洲は今や經濟的の王道樂土が建設されんとそれ〳〵努力してゐる事實は洵に歡ばしい事で、益々我等の任重きを感ずる次第、皆さんの御健勝を祈ると結ばれた。

最後に和賀義見師は『降誕佛と本佛』と題してこの法筵にふさはしいお話を致されて五時過終講。一同唱題しつゝ散會した。

團員總會 四月廿四日午前十一時より本部に於て定期の總會を開催し、遠く福島支部よりは中村夫人、横濱よりは金子、西村、佐藤等の諸氏、川崎の毛見氏其他二十餘名、殊に大阪の岩見船長が幸に入港中の貴い時間を割いて參加され、磯部常任理事より昨年度の事業報告や會計勘定を示し、又本年度の事業と其豫算を議し、滿場感謝の意を以て原案可決、此際大に各位異體同心協力一致で精進すべく誓ひ、終つて午餐を共にし、二時より日蓮聖人の開宗會に移つた。

猶昭和十二年度會計狀態は左記の通り、

會計狀態

收支勘定明細表

（自昭和十二年四月一日 至昭和十三年三月廿一日）

一、收入之部

一金五、七六參圓七參錢　總收入

內譯

金　七六八、〇〇　寄附金及維持費
金壹、〇九貳、九壹　團費並誌料
金　壹五〇、壹〇　書籍小冊子賣上代
金　壹〇貳、〇〇　講座聽講料
金　壹七壹、七〇　法要喜納金
金壹、八〇〇、〇〇　上田理事長補助
金　八〇〇、〇〇　基本金利息
金　壹九七、五〇　雜收入
金　六八壹、五貳　前年度越高

二、支出之部

一金五、參五四圓五五錢　總支出

內譯

金壹、七七九、〇〇　雜誌印刷製本代
金　四參、五四　布教用諸印刷費
金　八壹八、五〇　講師謝儀
金壹、參貳壹、貳五　教化並法要諸費
金　貳貳五、四貳　內外通信費
金　七參、四五　電話基本金及通話料
金　壹壹參、九貳　諸稅及分賦金
金　貳〇四、〇貳　書籍新聞及文房具
金　壹四七、九貳　瓦斯及炭費
金　八四、八五　電燈料
金　壹四、八〇　水道料
金　壹八七、貳四　交通費
金　壹參貳、〇〇　速記料
金　貳八、九壹　什器費
金　七六、壹四　修理費
金　壹〇參、五九　諸雜費

三、收支差引勘定

一金四〇九圓壹八錢　次年度へ繰越

右之通報告仕候也

財團法人統一團
理事長　上田辰卯

日蓮聖人 **御遺文講座**

日時、　毎週火曜日午後六時三十分勤行
　　仝　七時　開講
場所、　統一會館講堂
御書、　觀心本尊鈔
講師、　小林一郎先生

主催　財團法人 **統一團**

種村、福岡兩君渡支

本團員であると倶に二而不二の關係にある同心會員の種村五郎君及び福岡駒雄君は、今回吾人の日夜唱導せる第一義の重大使命を擔つて、北支に宣撫官として急遽四月二十一日午後三時東京驛を御題目と萬歳の百雷に包まれ、昇天の意氣を持つて第一陣に立たれた、『日蓮が弟子檀那等臆病にては協ふべからず』『日蓮が一類は師子の吼ゆるなり』日蓮聖人の氣魄を自任し、日持上人の昔を今體驗せんとする兩君の前途に對し切に佛祖三寶の御加被を祈る。

南無妙法蓮華經

兩君の第一信

合掌　景福丸船中二三等は立錐の餘地も無之僅かに便宜假睡仕候戰時體制下北支の風雲を示唆するかの如く風浪徒らに高きも兩人共に意氣旺盛感慨深きもの有之候共に語り共に睡り豫定より十數分遲れ六時過ぎ釜山到着仕候雪崩を打つて下船、連絡急行ひかり號の二等綾臺券は既を數日前より豫約濟み三等綾臺も勿論賣切れの有樣もの凄き人の流に御座候二等客車の半分約三十名は座席無之混雜を極め手荷物積込の手違は遂に三浪津にて途中下車一汽車待つ事に相成り隨つて北京着は二十五日朝と可相成明朝この由を北京へ打電可仕候も開顯せば一切摩訶妙力に御座候兩人共益々勇躍誓しの態をこの三浪津に求め一路前進可仕池田樣田中樣辱知皆樣に宜敷お傳の程願上申候

南無妙法蓮華經

四月二十二日午後九時

朝鮮三浪津にて　種村、福岡拜

維持團員堀江夫人逝去

護法篤信の女傑堀江千代善女人は、別項の如く四月十三日午後正十時、一同の唱題裡に模範的の臨終を示し、大なる教誨を貽して他界に甦生された。

法號　本感院妙行日成大姉

虔みて御回向を申上げる。

南無妙法蓮華經

賛助員大谷船長訃

海軍豫備佐官東京灣水先案内の大谷又吉善男子は、昨夏就床已來手厚き看護藥石も效なく、遂に四月二十日午前十時過に眠るが如く逝かれた。行年五十六歳

法號　大成院了眞日又居士

謹みて御冥福を祈り奉る。

南無妙法蓮華經

團費誌料維持費及寄附金領收

（自三月二十一日至四月二十日）

一金拾圓也　東京　新實德三郎殿
一金五圓也　足利　山口鐘造殿
一金拾圓也　東京　柴田武治殿
一金貳圓貳拾錢也　同　坂上昭殿
一金壹圓貳拾錢也　靜岡　石上長作殿
一金貳圓五拾錢也　仙臺　井上才吉殿
一金貳圓貳拾錢也　横濱　芝木蓮成殿
一金貳圓貳拾錢也　豊橋　田村仙作殿
一金貳圓貳拾錢也　福井縣　竹内太八郎殿
一金貳圓五拾錢也　福島　菅野豚太郎殿
一金貳圓五拾錢也　東京　古澤たみ殿
一金貳圓五拾錢也　同　森山太郎殿
一金貳圓五拾錢也　横濱　夕田信太郎殿
一金貳圓貳拾錢也　東京　藤崎勘三郎殿
一金貳圓五拾錢也　同　榎本正殿
一金貳圓五拾錢也　同　榎本まさ子殿
一金壹圓也　同　小峰登子殿
一金貳圓貳拾錢也　千葉縣　横山敏殿
一金貳圓貳拾錢也　山口縣　中村明法殿
一金參圓也　横濱　原辰
一金五圓也　横濱　宮本正三殿
一金貳圓貳拾錢也　明石　堀川福太郎殿
一金貳圓五拾錢也　新潟縣　高橋大吉殿
一金貳圓五拾錢也　神奈川縣中村銀藏殿
一金拾貳圓也　東京　小川吉助殿

右雜有入帳仕候也

財團法人統一團會計

猶一々領收證は差上げません、可然御諒承の程お願申上ます。

本部には加入者負擔の振替用紙を用意して居りますから、御入用の方は便宜御請求下さい。

團費誌料等は恐縮ですが成るべく滯らぬやうに御配慮お願申上ます。宣傳用に成さる場合は、殘本の許す限り無料贈呈致します。

鈴木上人序
小林先生序
磯部滿事著

佛教の心髓

最新刊

四六版クロース上製
特價金壹圓也
送料金九錢

佛教は萬古を通じて人天の一大燈明である。特に現代には公平無私の淨念を持つて之を認識する必要が大にあると思ふ。法華經を知らずしては人生を論じ難い、壽量品を手にせずしては超人格者を語る資格はない、超人格を拜せざる者は人間でない不知恩の畜生なりと古聖は喝破された。愛國勤王の士魂は實に法華經に依つて植付られる。

小林先生曰く、『教といふものは宛かも藥のやうなもので、病が非常に重くなつて初めて眞の靈藥の貴さがわかるのである。世の中が今日の如く極度に切迫し、人の心が今日の如く極度に險惡になつて、初めて壽量品の最も貴いことが昔く世の人に理解せらるべきであらう。磯部君が今日に於て此の書を公にせらるゝは最も其の時を得たるものと稱すべきである。……喜んで此の書を江湖に推薦する……』

本多日生上人著書特價提供

聖語錄 改版	特價	金壹圓八拾錢
法華經要義	送料共	金貳圓五拾錢
賜天寶	仝	金壹圓五拾錢
日蓮主義心髓	仝	金貳圓九拾錢
日蓮主義精要	仝	金拾五錢
眞理の基礎に樹つ佛教の信仰	仝	金五拾錢
法華經要品	仝	金參圓廿五錢
日生上人レコード（四面）	仝	金拾錢
日蓮聖人	仝	金貳拾錢
本尊意識に就て	仝	金貳拾錢
釋尊の八相成道	仝	金壹圓五拾錢
法華經の心髓	仝	
磯部滿事著		
本多日生上人	特價	金壹圓七拾錢
勤行作法	送料共	金拾錢
佛教の眞髓	仝	金壹圓
河合彭明著		
皇道と日蓮主義	定價 送料共	金壹圓

月刊「教」誌

定價一冊 金拾錢
送料 金五厘
一ケ年前金 金壹圓貳拾錢
送料共

申込所 東京市小石川區晉羽町六丁目 振替口座東京一〇九四〇番 「教」發行所

東京市小石川區晉羽町六ノ十七
財團法人 統一團出版部
振替東京九四二〇番

統一定價

一冊 金貳拾錢 送料壹錢
半ケ年 金壹圓貳拾錢
一ケ年 金貳圓貳拾錢 送料共

注意

▲御申込ハ總テ前金ノ事
▲前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可致候
▲御轉居ノ場合ハ必ズ新舊共直ニ御通知ノ事

昭和十三年四月廿七日印刷納本
昭和十三年五月一日發行
（第五百十八號）

東京市小石川區晉羽町六ノ十七
編輯兼發行人 磯部滿事
東京市四谷區內藤町一
印刷人 山田英二
東京市小石川區晉羽町八ノ十一
印刷所 野島好文堂印刷所
電話牛込六九六六番

不許複製

東京市小石川區晉羽町六ノ十七
發行所 財團法人 統一團
電話牛込五三三六番
振替東京九四二〇番

目次

佛教の根本と其の應用（其一）……本多日生
開目鈔講話（第二十講）……小林一郎
日蓮宗概觀（其十二）……梶木顯正
無窮の子……木田芳雄
記事
○本部團報　○大日本立正會報　○福島支部報
○團費誌料寄附金及維持費領收
大藏經要義續篇（其十）……本多日生

第四十三年　六月號

13/11-21